始

物け化と仰信

白山謙致著

70-338

信仰と化け物

白山謙致著

大正
5. 2. 22
内交

緒言

一、本書は眞宗の信仰を、單刀直入的に說きたる者にして、別に順序を追ひて大綱要義を組織したる者にあらず。

一、信仰は元來冷煖自知的の者なり、之を說かんと欲して說くべきにあらず、さりながらまた、之を說かざれば之を味ふに由なし、乃ち離言の外に依言の必要起る所以にして、本書の刊行亦これ、其理に依る。

一、信仰の妙味は、素と是無限、一朝一夕に、之を説き盡し得べきにあらず、今は僅に大海の一滴、濱の眞砂子の一粒を擧げたるに過ぎず、請ふ之を諒せよ。

謙致識

信仰と化け物目次

第壹章　通じて信仰の德を説く……一

第一項　信疑決判……一

第二項　疑心暗鬼……四

第三項　化け物屋敷……一〇

第四項　化け物の正體其一……一七

第五項　化け物の正體其二……二六

第六項　世界的信心歡喜……三四

第七項　三世的信心歡喜……三八

第八項　信心歡喜の根柢……四一

第二章　別して阿彌陀佛の信仰の一斑を叙す……四六

第一項　西方世界……四六

第二項　阿彌陀佛の穿鑿……六〇
第三項　他力廻向の信……六九
第四項　阿彌陀佛の念力……七八
第五項　佛心凡心一體の眞意義……八五
第六項　佛凡相互の會心……一〇二
第七項　相互無條件の信頼……一〇九
第八項　祈ることなし……一二〇
第九項　感謝の生活……一三二
第十項　公的行爲……一四〇

第三章　因みに誤解を通す……一四六

第一項　過現實感の擴充……一四六
第二項　靈光に觸れざる可らず……一五六
第三項　貧富を超絶す……一六二
第四項　單なる轉居にあらず……一六六

第五項　蘇るにあり……一六九

第四章　信仰の副産物……一七六

第一項　桃栗三年柿八年……一七六
第二項　己が種蒔き……一八四
第三項　御見透し……一八九
第四項　希望に充つ……一九三

信仰と化け物

白山謙致述

第壹章　通じて信仰の德を說く

第一項　信疑決判

吾眞宗正依の經典たる大無量壽經下卷の初に「信心歡喜」といふ御語かある、是卽ち信仰定まる所に、其處に必ず喜びの思あるに至る

といふの謂である、これは斯くあらねばならぬ筈であると思はれる、其故如何となれば、信心の裏は疑でありて、我等若も一たび疑の思を起すに至るならば、所謂疑心暗鬼を生ずるに至つて、其處に必ず一種の化け物を、己が心より産み出すに至らねばならぬのである、若夫れ化け物を生ずるに至りたりとせんか、其處に何等の喜もあるではなく、其處に必ず、一種不安の念を生ずるに至り、其が心配ともなり、苦勞ともなり、又遂に其が恐怖ともなるに至るが、自然の道行であると思はれる。

二

若夫れ恐怖を除かんと欲するならば、先づ化け物を退治せねばならぬのである、而して化け物を退治せんと欲するならば、先づ疑を除かねばならぬのである、而して其疑の除かれたるが卽ちこれ信といはるゝ者であるからは、苟も信ある所に、其處に化け物は消え失せるに至りて、其處に必ず安心の思あるに至り、其處に必ず喜の思の生ずべくあるといふ事も、亦是自然の順序であると思はれる、これ之を名けて信心歡喜といふのである。

三

此故に我等は、この人生五十年を渡る上に於ても、成るべく疑を起すことのない樣に、成るべく信心歡喜の狀態に於てあり得る樣にと、心掛けねばならぬのであると思はれる。

第二項　疑心暗鬼

一

文學博士井上圓了先生は、妖怪學の研究に心を碎いて居らるゝ御方であるといふ事は、何人も飽迄承知せらるゝ所であらう。

同先生が、或時化け物を見られたといふ事である、卽ち某年、先生は箱根の山奥へ湯治に往かれた事がありて、或日、夕飯を濟まして後、散歩かた〳〵山道を辿り歩いて居られた所が、急に夕立ちが降つて來て、風さへ强く吹いて居る、これは困つた者であると思ふて居られたが、恰も好し、其附近に一軒の休み茶屋があつたから、

先生は取敢へず其處にかけ込んで、休息かた〳〵雨の已むのを待つて居られた。

然るに其が、何時まで待つても已むべき樣子がない、そこで、これではならぬと、先生は事情を話して、其休み茶屋から、一本の傘と、一個の提灯とを借用して、唯一人とぼ〳〵と、暗夜の山道を、歸り來られた。

さうすると其途中に於て、あたりは眞ッくらではあるが、提灯の照す所に由て見ると、約十數歩の前に、一軒の空き家の樣な者がある樣に見受けられる、さうして其家の隅の方に於て、ポカリ〳〵と火が燃えるのを見た、先生はこの時、ハテナ、これは何であらうか、

蓋し狐の所作でもあらうか、或は狸のしわざでもあらうか、孰れにもせよ、怪しき事であるよと思はれたから、先生は暫く其處に立ち止まりて、樣子を眺めて居られると、其處に慥に何か黑き一物が、蹲りて動いて居る樣に見える、暫くすると其が立ち上がつた樣であつて、其が又のそり〳〵と歩みはじめて、而も其が、己の方に向つて進んで來る樣に見える、さすがの先生も、これはたまらぬと思はれたのであらう、かゝる場合に於ては、他に善き方法があるではないと、たゞ、三十六計遁げるに如かずといふ譯で、先生は一目散に、かけ出されたのであつた。

さうすると後ろの方から追ひかけつゝ、聲を張り上げて、モシ、モシ、と呼び掛けた、先生此聲を聞いて、ハテ、是は人間であるわい、狐であるでもなければ、狸であるでもない、況や幽靈であるでもなければ、化け物であるでもない、慥に是人間であると解つて見れば、左程恐れて遁げるにも及ばないのである、兎に角樣子を聞いて見樣と思はれた譯から、アト振り回りて事の次第を尋ねて見ると、其が郵便局の集配人であつたのである、卽ち集配人が、郵便配達の爲に出向いて來た所が、其携へつゝあつた所の角灯の燈火が、圖らずも消えた、そこで之を點さうと思ふ譯から、丁度其處に空き家のあつたのを幸に、其隅の方に身を寄せて、頻りにマチを擦つて居たのである、然るに風は强く吹いて居る、雨はひどく降つて居る、其

上、マチは濕つて居るといふ譯から、一本擦つても、火が、ランプに移らぬ、二本擦り、三本擦り、四本五本と擦つて居た、其火が、ポカリ〳〵と燃えて、井上先生を驚かすに至つて居たのであつたと云ふ事が解つた。

斯くして集配人は、マチが思ふ樣につかぬのに困つて居た所へ、圖らずも提灯の燈火が見えたから、ヤレ嬉しや、アノ提灯の火を借りてランプに移しさへすればよい、骨折つてマチを擦るにも及ばぬ、やがてアノ提灯がこゝへ來るであらう、マア暫く待ちましやうと思ふて居たのに、此事情を知らぬ提灯の持主は、ハテナと思ふて其處に立ち止まつて仕舞つたのであるから、集配人としては氣が氣でない、早く來て呉れゝば善いにと思ふて居るのに、いつ迄待つても、提灯の動く樣子がない、そこで、これではならぬと、集配人は、自分の方から歩き出して、出懸けた所が、提灯の持主は尙も驚いて逃げ出すに至つた、サア逃げられてはならぬといふ譯から、集配人は聲を上げて、モシ〳〵と呼んだのであつたといふ事が知れた。

井上先生も、事の始終を聞込まれて、さうであつたか、そんなら左程驚くにも及ばないのであつたのにと、こゝでは笑ひ話となつて仕舞つたといふ事であるが、面白い事であると思はれる。

二

しかし其笑ひ話となつたのは、蓋し化け物の正體を見屆け得た後

の事であつたので、こゝに至る前の時には、慥に井上先生の心の中に、一種の疑心があつた譯から、其處に化け物が見えて居たのであつて、其處に又慥に一種の恐怖が起つて居た者であると思はれ得るのである、繰返して之を云ふに、疑は化け物を產むのであり、化け物は恐怖を生ずるに至るのであるよ。

第三項　化け物屋敷

一

若夫れ此種の疑が、家庭の中に起り來ることあらんか、家庭は乃ち化け物屋敷となり了るに至るのである。

夫は以爲、近頃家内の素振りがなんだか怪しきよと、家内は思ふ樣、昨今、夫の動作が如何にも常ならぬよと、親は悴を眺めて、此悴近頃、何か善からぬ遊びに耽り居ると見えるよと、悴は親父を見て、此親父、ドウモ今日此頃、をかしい樣子があるわいと、此の如くして、姑は嫁を、嫁は姑を、姉は妹を、妹は姉をと、いふ樣な工合に、相互に疑ひ合ふ樣になつた以上には、最早互に化け物扱ひをする樣になつて來て居るのであるから、相互に油斷をする事もなく、相互に用心をも仕合ひて、各々腹底を隱して仕舞ひ、此事だけは親にも云はれぬ、此事ばかりは子にも話されぬ、イヤ夫に聞かれては

大變、イヤ家内に知られては困る、若も嫁に見られては大騒動、若も姑に鑑付かれては一大事と、互に隱し事をこしらへ、互に祕密を造り、其が又單に胸の内、心の中にのみに止まることなくして、遂には其が姿に顯れ、形に出でゝは、箪笥に錠を卸す樣な譯ともなり、文庫に鍵を掛ける樣な次第ともなり、其他本箱であらうが、机であらうが、又は火鉢の抽斗であらうが、己が一切の手道具に、嚴重な締りを施して、常に氣を付けて居るといふ樣な譯となり、心暫くも落付くこと能はずして、己が周圍に己が味方は一人もあるではなく、唯己一人のみの生活と思ひなすに至りて、明け暮れ、寂しき日暮しをなす樣な譯と、ならざるを得ざるに至るのである。

サアさうなつて見ると、そこに愚痴がこぼれて來る樣になる、泣き言が出て來る樣になる、不平を洩さずには居られない樣になる、……ドウシテ我身はこんな不仕合せな身の上であつたらうよ、イヤナ夫を持つて仕舞つたわい、イヤナ家内を貫つてしまつたわい、イヤナ悴が生れて來た者よ、イヤナ親父があつて呉れた者よ、嫁の顔を見るのもイヤよ、姑のそばへ行くのもイヤよ、あゝ思へば！〳〵イヤナ世界であるよ、うるさい娑婆であるよ、一生五十年、こんな思で暮さにやならぬとは、ドウシタ因果の報いであらうやらと、胸のいゝ、しこりに始末がつかず、遂には其しこりが破裂するに至つて、所謂

夫婦喧嘩ともなるに至るのである、又は親子の爭ともなり、又は嫁と姑との衝突ともなるに至るのである、其處に土瓶も飛ぶに至るであらう、茶碗も跳ねるに至るであらう、遂には火鉢も箪笥も、盛に躍り出す樣な譯ともなるに至るのである。

三

而して又、其が更に烈しくなると、煩悶懊惱の極、くやしまぎれのはて、遂には死に場所を探す樣な譯ともなるに至らざるを得ないのである……　サー、ドコが善からうか知らん、華嚴の瀧は遠ほすぎるし、汽車賃も入るから、これは頗る不經濟である、隣りの井戸では、あんまり近かすぎて、張合ひがないし、さりとて鐵道往生は痛たさうで、アブナクもあるし、イッソぶらんこにしやうか、それともモヒの方が善からうか、などゝ云ふ樣な思案に暮るゝにさへも至るのである。

四

サアさうなつて見れば、モハヤ病犬同樣、手當り次第に嚙みつくといふ樣な譯で、親であらうが、子であらうが、なんの見さかひもあつたものではない、夫婦の間も、嫁と姑との其も、凡てが丸でかたき同志、仇と仇との向ひ合ひ恨みと恨みとの睨み合ひ、家庭の全體が其處に慥に一種の化け物屋敷となつてしまふに至るのである。

五

あゝこの、廣々としたる天地の間に生れ出でながら、少しも伸びゝとしたる日暮しを、する事の出來ぬ樣になつて居るといふのは、誠に氣の毒の至りであると思はれるのであるが、世の所謂無宗教の人々の家庭、無信仰の人々の寄り集まれる所は、多くは此の如き有樣になつて、居るのではなからうかと思はれるのである、これをこれ、迷の日暮しといひ、これをこれ業ざらしの世渡りといふのである、而して斯くなり來りたる原因如何にと尋ぬれば、たゞ最初一たび、不圖した事から疑ひ合ひ、其處に互に、己が心より、暗鬼を生ずるに至りたりしに由るのであつたとすれば、世に、疑といはるゝ者ほど、恐ろしき者はないのであつたといふ事が、しみ〴〵と思ひ知らるゝに至るのである。

第四項　化け物の正體　其一

一

若夫れ化け物を退治せんと欲するならば、是非に其正體を見屆けるに至らねばならぬのである、卽ち家庭内の化け物に就いて云はゞ、親の正體、子の正體、夫の正體、家内の正體等、能く之を見屆けねばならぬのである、こゝに佛は敎を垂れて宣はく、汝等の前に在る者、卽ち親なる者も、子なる者も、又は夫なる者も、妻なる者も、

決して汝等の敵であるでもなく、又汝等の仇であるでもない、實に汝等相互に、最親しき間柄の者のみ相集り來れる者であるよと、あゝ、然るにも拘はらず、人多く之を味ふことなくして、親と子と、夫と妻と、其他相互に、之を化け物扱ひしつゝあつたといふのは、恥かしき事の限りであると、云はねばならぬのである。

二

この相互に最親しき間柄であるといふことは、之を世間の學問の上から聞いて見てさへ、なるほどゝ、頷かるゝに至るのである、卽ち學問は敎へていふ樣、其處に天地の間に、諸種の物柄が置かれてあるとはいへ、其第一の階級に在る所の、人類と云はるゝ者と、其次なる階級に在る所の、下等動物と云はるゝ者との間に、何等の境があるでもなく、相互に行き拔けであるといひ、又其下等動物の世界と、其次なる階級に在る所の草木の世界との間にも、さうして又其草木と、其次なる階級に在る所の金石との間にも、其處に更に隔てがあるではないといふので、要するに、上は人間世界より、下は下等動物の世界、及び草木、及び金石の其に至る迄、終始一貫せる者であるといふのである、而して其が何故ぞといへば、蓋し此等の孰れもが皆、かの元素といはるゝ者より成れるに外ならぬ故であるといふのである。

而して其元素と云はるゝ者は、素と是個人的の者ではなくて、實

に世界的の者である譯から、我れの元素と云はるゝ者があるでもなければ、彼れの元素といはるゝ者もあるではない、或時は來りて此處に宿りて、我身體を構成し、他の時は往いて彼處に到りて、彼物の體軀を組織するといふ樣な譯であるので、頗る融通無碍の者であるのである。其故に、譬へば我等が日々吐き出す所の炭素といはる者を、草木は之を受取り、以て己が體軀となし、草木が尅々に吐き出す所の酸素といはるゝ者を、我等が之を受取り、以て己が身體となすといふ樣な工合になつて居るといふのであるから、畢竟此我身と、彼草木との關係は、親類と云はんか、同胞と云はんか、否ナ實は全く、相同じき者であつたと云はれ得るといふのである。

夫れ斯くの如くして、其が啻に、我等と草木との間に於てのみならんや、萬物相互の間が、此の如くであるといふのであるから、萬物相互に、無關係の者であつたのではない、萬物相互に、親類と云はんか、同胞といはんか、否ナ實は全く、相同じき者であつたと、云ひ得る譯であるといふので、相互に極めて相親しき間柄であつたと、味はるゝに至るのである。

三

佛敎中にも、此元素といはるゝ者を、六大と數へ、更に深く宇宙の祕密を發いて之を一如と說きつゝ、其處に一層綿密に、一層巨細に、理論的の證明を與へつゝある譯ではあるが、今は其等を御預り

として拙著「人生觀上の二大問題」中に評論の據定之を通俗的に、やさしく敎へて下されてある部分の敎意をのみ取り來りて見れば、曰く、因緣關係の顯れであるよといふのである、卽ち袖摺り遭ふも多少の緣、況や、語を交へて懇親を結ぶの朋友となり、又は互に助け合ふの親戚となる者、實にこれ、淺からざる關係の顯れであるに、其上、親子ともなり、夫妻ともなり、兄弟ともなるといふ者、實にこれ、おぼろげの因緣であるではない、卽ち相互に相離るべからざる、親しき親しき關係ありて、其が今、此の如く顯れ來りて居るのであるといふのである。

其故に、手近く己が身、己が家に就いての親戚關係なる者を、尋ね尋ねて見ても、其が次第次第に擴げられ行きて、遂に止まる所を知らざるに至るのである。

若夫れ、その關係ある者を悉く招き集めて、平素常に親戚的の交際をなさんと欲するならば、實に國內全體、世界全體、人類全體にまでも及ぼして行かねばならぬ樣な譯ともなるのであると、知らるるのである、其が延びては、此狗にも因緣があり、彼猫にも關係があつたといふ事になるのみではない、此處の庭木にも手を懸けた事もあり、彼處の樹蔭にも憩ふた事もありといふ樣な譯で、現に木造の家の中に棲み、石造の藏の中に居り、大地の上に立ち、日月星辰の御照しを受けつゝあるといふ樣な事を、思合せて來て見れば、我等は實に、萬物と離るゝ事能はず、天地と別るゝ事能はず、身動き

もならぬまでに、因縁に依て包まれ、關係に依て取卷かれてあるといふ事を、思はざるを得ざるに至るのである。

あゝ思ふて此に至るならば、我等は、何處を眺めて見ても、仲善く、睦まじくして、暮し行かねばならぬ身の上であつたといふ事が味はるゝに至るのである。

四

たゞ其が、自ら其處に親疎の別がありて、次第に疎なる御方々に對しては、平素御無沙汰勝ちに流れて居るとばいへ、其御恩を忘れては相濟まぬ譯であるに、まして次第に親しき御方々に對して、御無禮を演ずるといふ事が、出來得べき譯の者であるではない、況や親しき中の、最親しき間柄の、寄り集り居れる家庭の中に在て、明けても暮れても、喧嘩口論、又は投ぐり合ひ、睨み合ひ抔しつゝあつては、ならぬ譯の者であつたといふ事は、之を說くさへ面目次第もない事であり、之を今初めて思ふさへ、餘りに愚かな事であつたと、慚愧の思に沈ましめらるゝに至るのである。

然るに其が、實は平素斯く感ぜられてあるでもなく、斯く味はれて居るでもなく、却て多くの爭や、騷動や、又は犯罪が、屢々家庭の不和から生じて來て居る抔といふのは、何たる淺猿しき事であらうよ、實にこれ、之を迷の衆生といふのであるとの御敎が、しみじみと胸にこたへわたるの思があるのである、御互に、あやまりはて

るの思がなくては、ならぬのであると思はれる。

第五項　化け物の正體　其二

一

以上は單に之を、空間的に味ひたるのみの事であるが、同時にまた之を時間的に味ふて、久遠の古、遠き昔の其時から、此の如き關係や因緣が、重なり重なり來りて、今此通りに顯れ來りて居るのであつたよといふのが、佛敎の敎である。

其故に、世界の全面を見渡した所、たとひ其處に今は餘り親しき間柄とはなりて居らずとも、實は前の時には、親子の關係であつた者も居るであらうし、夫妻の其であつた者も居るに違ひもなく、又之に反して、前の時には、少しく疎かりし間柄も、今は極めて親しき續合ひとなりて居る者もあらうし、實に永き以前の其時から、お互に生れかはりつ、死にかはりつ、流れ流れて今日に迄及んで來たのであるといふ事を思ふて見れば、其間實に複雜なる關係を生じ來りて居る譯であるので、實は之を一朝一夕に說き得べくあるではない、百千俱胝の劫を經て、百千俱胝の舌を出して、之を說いて見た所が、決して說き盡し得る譯の者ではないと知らるゝのである。

このこみ入りたる模樣振りを味ふて見れば、たゞ眼前の、表面の

事實をのみ眺めて、其處に簡單なる判斷を、手輕く下し去りて、其で善いと思ふて居る抔といふは、餘りに小供らしき淺見であると云はねばならぬのである、少しく愼重の態度を取りて、之を謹むの思いくらゐはあつても善い者であると思はれる。

二

此に於て釋尊は敎へて宣ふ樣、我等は久遠の古以來、其生れ替る度毎に、常に必ず兩親を持つて來たのであつて、實に數へ來らば、多くの父を持ち、多くの母を持つて來たのであつたのである、而して其等の父、其等の母が、今また此處に、至る所に生れ來り給ひつゝあるべき事を思ふ時、「一切の男子を見る毎に、これ我前生の父なりし者よと思へ、また一切の女子を見る毎に、これ我古の時に於ける母なりし者よと思へ」と仰せられてある。

而して其がまた、たゞ單に人類に對する時に於ての心得であるばかりではない、一切の生物に對するの時、亦實に此の如く感ずべくある譯から、かの行基菩薩は

山鳥のほろ〳〵と鳴く聲聞けば
父かとぞ思ひ、母かとぞ思ふ

と咏ぜさせられてある、卽ち我前生の時に於ける父上が、今は此の如き姿となりて、此世に生れ來りたまひつゝあるか、或は又我古の時に於ける母上が、今は此の如き形を顯して、こゝに生じ來りたま

ひつゝあるかと思ふ時、山鳥の鳴く聲を聞くにつけても、そこに我前生の父戀ひし、我前生の母慕しいとの思が起ると申さるゝの謂である。

其他、源信和尚が、鹿の道を踏み迷ひて、人鄕近く來りたるを、疾く山中へ追ひ歸らしめたまひたるが如き、又は眞興大德が、同じく鹿を、獵師の手より救ひたまひたるが如き、或は又明惠上人が、弟子某の、狗子を跨ぎ行けるを誡めたまひたるが如き、孰れも動物に對して、特種の思召を向けたまひし者、其處に實に尊き味が籠められて、あらねばならぬのであると思はれるのである。

其他草木を大切にし、金石を勞はりたまひたる高僧大德の逸話の傳はつて居る者も、尠くはないので、蓮如上人の如きは紙屑をさへ頂禮したまひたといふのである。

三

要するに孰れも皆、單に世界の表面をのみ眺められたのではない實にこれ、過去の古より今日に至る迄、永き時間を經て、織りなされ來りたる、縱横無盡の繪模樣を、觀察せられたる上に於けるの感想であるので、思をこゝ迄運ばすに至つて居るのでなければ、決して宇宙の眞相、天地の妙趣を味ひ得べくあるのではない、これぞ宗敎、否ナ特に佛敎の敎ふる所の者であるので、我等一たびこゝに信仰の起さるゝに至る時、其處に小さく狹き我等の胸も、思はず大な

る靈感に打たるゝに至つて、其處に、我、吾を忘るゝに至るのである。

四

あゝ我等從來の觀察は、大に誤つて居たのである、實に正鵠を失つて居たのである、親子互に相爭ひ、夫妻互に腹底を隱し合ひ、親戚に對し、朋友に對し、無禮なる思を持つて居たといふ事が、何共相濟まぬ譯であつたと思知られて、なんと御詫びを申したらば善いのであらうかと、偏に胸は焦がさるゝに至るのである。

五

或宗敎の敎ふる所に依らば、人間以外の萬物は、凡て皆、人間の爲に造られてあるといひ、殊に人間の食用となるの獸類、鳥類、魚類の如きは云ふに及ばずといふのであるから、人間が之を屠り、之を食らふ所に於て、其等が最初造られたりし目的を達し、其所詮を顯し得るのであると云ひ得る譯で、人間の爲には、甚だ都合の善い話であるかは知らぬが、たとひ萬に一、さういふ譯であると假定して見ても、我等人類一般は、其等の御蔭に依て、己等の生命を持續し得て居るといふ譯から、實に常に其等に對して謝意を表しつゝあるべき者であると思はるゝのに、毫も其等の事を念頭に置くでもなく、少しも彼等に對して同情を寄するの思さへなく、勝手次第に之を捕へ、勝手次第に其生命を奪ひつゝありて、之を當前であるとし

之を人類の權利であるとして居る樣な模樣振りであるのは、實に我佛敎の敎ふる所の者とは、雲泥の相違あり、天地の區別ある者であると、思はるゝのである。

第六項　世界的信心歡喜

一

我等は從來、疑の眼を以て眺めて居たればこそ、其處に諸種の化け物が、顯れて來る樣な譯ともなり、其處に諸種の失態を演じ來つて居たのであつたが、今は化け物の正體を見屆けさせられ得て、單に現在の今に於てのみではなく、遠き過去の古より、實に相離るべからざる親しき間柄の者のみが、遭ひつ、別れつして居る此世界であつたぞと、味はしめられて見れば、其處にお互に用心をし合ひて、氣を附け合ふて居らねばならぬ譯があつたのではないと、知らるゝに至つて、大にこゝに安心する事が出來る譯となつたのである。

二

其に就いては先づ差當り、家庭の中に於ける化け物一切を、今早速に之を引込ませねばならぬのであるといふ事は、いふ迄もないのである、卽ち今迄は、親を見ても、あぶない人であると思ひ、子を見ても、怪しき者であると考へて居た其思を飜して、我親は、慥か

な人である、間違のない人である、親切なる御方である、慈悲深い御人であるといふ樣に思ひなし、又子を見ても、此子はあぶない者である、油斷のならぬ者であると考へて居た其思を改めて、我子は慥な子である、間違のない子である、といふ樣に思ひなして、親と子と、雙方互に能く信用し合ふ樣にならねばならぬのである。

三

夫れ此の如くして、夫も己が妻を信用し、妻も己が夫を信用し、兄も弟も、姉も妹も、嫁も姑も、相互に信用し合ふに至るならば、其處に毫も不安の念の起る事もなく、あやぶむ思の生ずる筈もなく、慥に其處に安心の思、平和の思あるに至つて、所謂親と子、夫と妻、兄と弟、姉と妹てふ眞の親しみ、眞のうまみを感じ得るに至るのである、乃ち其處に歡喜の思あるに至るのでありて、これ之を、家庭の間に於ける信心歡喜、又は人と人との間に於ける其といふのである。

四

而して同時に又、萬物相互の間に於て、此妙趣を味ふに至るの時、其處にこの信心歡喜が、遂に世界的の者となるに至るのである、我等は必ず、この世界的の信心歡喜なる者を、味ふに至らねばならぬのである。

第七項　三世的信心歡喜

一

以上說けるが如き思想、卽ち世界的信心歡喜なる者が、今といふ今に至る迄、此我等の心の中に、起り來らずにあつた譯から、我等は常に泣きづめになつて居たのであるよ、而も其が、短き間であつたのではない。實に我てふ者のありたりし古の時以來、卽ち無始の昔の其頃からの事であつたのであるが、其が今こゝに、凡て間違であつたと知らしめられたる今日より、靜に胸に手を當て過去の古をふりかへりて見れば、其處に過去に對する感想が一變し來りて、

一には、永き間に於ける諸種の誤解を慚愧するの思、

二には、こゝに改めて回想し得る幾多歡喜の麗はしき光景を味ひ得るに至るのである、卽ち親子、兄弟、親戚、朋友を初として、萬物相互に、打解け合ひて喜び樂み得る事が、單に現在の今に限られてあるのではなかつた、實は過去の古の彼時に於ても、又は他の時に於ても、慥に此通りに、喜の思を、味ひ得るのであつたのにと、こゝに腦中に幾多の繪模樣を畫き顯して、其處に一種の觀想に入り、其處に今は改めて、過去てふ時間の上に、再び活きかへる事を得るに至るのである、然り、此に再び過去てふ時間の上に活きかへる事を得るに至るのである。

二

而して其が又、過去と現在との、時間の上に於てのみの事ではない、今日の此心を未來永遠の末に至る迄も、持ち運び行かるべくあると思ひ知らるゝに至る時、其處に又未來に對する感想も、改まり來りて、

一には、疑心より生じ居たりし不安を去り得るの思、

二には、豫想し得る幾多嬉しき慶喜の思

を味ひ得るに至るのである、卽ち未來に於ける向上發展の繪模樣を心中に思ひ浮べて、其處にまた一種の觀察に入り、其處にまた改めて、未來の生命を味ふ事を得るに至るのである。

三

夫れ此の如くして、我等こゝに、過去の古より現在の今、及び未來の末に至るまで、實に三世を貫けるの、信心歡喜に入る事を得るの時、其處に初めて其が宗教的の者、否ナ其が實に、佛教的の者となり來るのであると味はるゝのである。

第八項　信心歡喜の根柢

一

あゝ我等こゝに今、實に尊くも世界的に信心歡喜の思を起し、又

實に有り難くも之を三世に渡りて味ひ得るに至る所以の者、其が決して不意の出來事であるではない、又其が決して偶然の結果であるではない、實に之が根柢となり、之が基礎となりつゝありたりし所の者は彼やるせなき、阿彌陀佛の本願卽ち是であつたのである。

二

阿彌陀佛てふ御方は、盡十方の無碍光を放つて、宇宙の全體を照し、常に憐みを垂れて、我等を善きに導き降されたまひつゝある所の、絕對無限の靈體であらせらるゝのであつて、此佛在せしが故にこそ、我等は能く此に至る事を得るのであつたのである、譬へば萬物の生育する所以は、太陽の光照あるに依ての事であつたといふが如く、太陽の在し降されたといふ事がこれ既に不思議、我等は能く不思議の本たる阿彌陀佛の本誓を味はねばならぬのである。

我等は永く、此本誓を知らずに居たのであるが、三千年の古、印度出現の大聖、釋迦牟尼世尊先づこれを宣說したまひ、尋で三國の諸高僧之を相承して御傳へ降されてあつたのである、而して我聖人一たび此本誓を味ひ、其處に信仰に入りたまふや否や、實に長夜の闇より救はれたまひ、九歲以來の煩悶は取除かれ、廿年來の懊惱は打ち破られ、遂に大安心の境に住したまひ得て、そこに歡天喜地の思あるに至らせられたのである。

三

以上の事、これ信仰に屬する所の者でありて、我聖人の、所謂實感であるからは、他の何人も、こゝに容喙する事を許さぬのである、卽ち如何なる學者であらうとも、又は如何なる權威を持てる人であらうとも、我聖人が、「吾は斯く之を信ずる」と、宣はせられてある所の者を、どうする事もならぬのである、勿論之を批評することも隨意ではあるであらう、或は之を斥け、或は之を誘る事も亦勝手ではあるであらう、さりながら、其等に依て、我聖人の信仰其者を、どうする事もならぬのである。

四

之を斥け、之を誘る者は暫く措き、若も一たび此信仰を承り得て、其處に同心する事を得る事あるに至るならば、其處に卽ち我聖人と、全く相同じき靈感に打たるゝ事を、得ることあるに至つて、其處に煩悶は取除かれ、懊惱は打ち破られ、大安心の境に住し得て、歡天喜地の思あらしめらるゝに至るのである。

＊　＊　＊　＊　＊

以下、章を改めて、この尊き、阿彌陀佛の信仰の一班を、叙せんとするのである。

第二章　別して阿彌陀佛の信仰の一斑を叙す

第一項　西方世界

一

阿彌陀佛の信仰といへば、先づ何人も第一に問を起してかゝる所の者は、其阿彌陀佛の御淨土が、西方であるといふ事これであると思はれる、これに就ては嘗て一度、雜誌「法話」紙上に愚見を寄せて、大方の批判を請ふた事もあつたが、今重ねてこゝに其要を摘んで見れば、凡そ左の如くの者であつたのである。

二

これは西方であるから、西方であるといふの外はないのである、譬へば日本帝國が、東洋に置かれてあるから之を東洋といひ、歐羅巴諸國が、西洋に置かれてあるから、之を西洋といふが如く然る者でありて、其處に何等の説明をも與へ得べくもなく、又如何なる解釋をも下し得べきではないのである。

更に附加へて云へば彼太陽が、其出づるや必ず東よりし、其入るや必ず西よりするといふ者も、亦是、法爾自然の約束でありて、たゞ此の如くあるが故に此の如しといふの外はないのと、全く相同じ

き譯であると思はれる。

三

さりながら、其西なる者が、所謂西の一方の、邊隅に片付けられてあるといふではなく、西である其儘に、其が廣大にして無邊際なる、十方遍滿の御淨土であるといふ事を、味はねばならぬのである。

然り、實は十方遍滿の御淨土ではあるけれども、其が實に我等の前には、其處に明に西方に拜まれて居るのである。

四

十方遍滿の者が、西方に拜まれてあるの模樣は、譬へば海の方角の如き者であらうか、海は素と是、世界全體を取卷いて居る所の、

云はゞ廣大にして無邊際なる者ではあるけれども、其が東京市民の前には、近く東の方に見られて居るのである、故に之を東といふに於て差支はないのであるのと、同じ樣な譯と思はれる。

然り、海は東に在る、否な慥に東の方に見られてある、さりながら、若も一たび其海の中に入り込んで見れば、素と是、全世界を包み圍める所の大海であつたといふ事を、知り得るに至るのである、今も其と相同じくして、一たびは之を西方として拜みたる御淨土なるも、其處に往生を遂げ得て見れば、其儘にこれ、十方遍滿の、廣大無邊際なる世界なりしことを味ひ得て、深く尊まるゝに至るのである。

五

斯様な譯で、西方が十方であり、十方が西方である譯から、時に或は之を東方といひ、又は之を南方といふも、善いのではあつたらうけれども、釋尊は特に我等の前に、之を西方として敎へ降され、常に又西方とのみ限られて說かれてあつたのには、そこに深き思召がある者と伺はれるのである。

其思召といふは外ではない、これ實に印度出現の釋尊が、其印度の風俗に隨ひたまひたるの譯に由るのであつたと伺はれるのである、若夫れ然らば、印度の風俗とは何ぞやといふに、蓋し印度に於ては、東西南北の四方の中、特に西方を尊び、又實に西方を以て上席となし居たりし者であつたと思はれるのである。

近く日本に於ける京都に於ては北方を上として居るのでありて、北を上京といひ、南を下京と呼び、北に行くを、上るといひ、南に行くを、下るといふて居る、越後に於ては却て國の南方を上越後といひ、其北方を下越後と稱へて居る。（これか理由の說明は今之を略す）

夫れ此の如くして、國の異るに隨ひ、其上と見込みつゝある方所や相同じからずとはいへ、兎に角東西南北中の一方を特に選び擧げて、其處に一種の習慣を造りつゝある其例や少なからざる譯であるが、其を印度に於ては、西を上席として居たのであつたと思はれるのである、何を以てか之を知るといふに、方角の文字から之を知る

ことを得るのである、即ち看よ、東をプールヷ Pûrva と云ひ、前といふ字を用ひ、西をパシユチマ Paśchima といひ、後ろといふ字を、南をダクシナ Dakshina といひ右といふ字を、北をウトタラ Uttara といひ高所といふ字を、用ひて居るのである。

南(右)
東(前)――――西(後)
北(高所)(北にはヒマラヤ山あるに由る)

この故に印度に於ては、人若し座に就かんとする事ある時、必ず東に向つて西に坐するを順當とし、時に長者と席を同うする事などある時は、必ず先づ長者を西に坐せしむる事、恰も日本に於て、長者には床の間を背にして坐せしむるが如くあつたのであらうと、思はれるのである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

而して釋尊はこれ三界の大導師にてあらせ給ふからは、其座を占めたまふや、必ず常に西より東に向ひたまひし者であつたと知らるるのである、其事は彼法華經説法の時、釋尊先づ東方萬八千土を照したまひ云々と云はれてあるより見るも、明なる譯であると思はれる、蓋し東方を照したまふには、御身、必ず西方に在て東に向ひたまひつゝあらせられたといふ事が、暗示せられて居るからである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

夫れ此の如くして、彌陀法を御演説なさるゝ時も、釋尊は座を西

方に占めたまひつゝあらせられしや明なる譯でありて、阿彌陀佛の五刼の思惟を說き、阿彌陀佛の超世の本願を敎へ、又正に阿彌陀佛の御淨土の方所を、示し給はんとしたまふに當てや、之を東方の下位に置きたまふ事もならず、又之を南方、北方等の片隅に据ゑたまふ事もならず、是非に之を上位に置きたまふべくあるや勿論なるが故に、乃ち釋尊は御自身の後方を指したまひ、彌陀は西方に在すのであるよ、其御淨土を西方に構へて御座るのであるよと、敎へたまひたる者であると伺はるゝのである、卽ち是、云ふ迄もなく、印度に於ける風俗上の便宜に依りたまひし者であつたと、拜察せらるゝのである。

六

更にまた他の方面を眺めて、比較宗敎學者の云ふ所を聞くに、古の人は太陽を、一の生活體なりと考へ、其が日々新に生れ出で、日日必ず死に去るものであると思ひ、而して其生るゝ時は必ず東より出で、其死する時は必ず西に往くを常とすと信じて居た譯から、人も亦死ぬるに當ては、必ず西に往くべき者と思ふて居た樣であると思はれる、其故に各國至る所に於て、死ぬるといふ事と、西といふ事とを、相關聯せしめて居たのでありて、埃及人の如きも、人の死ぬる時は、必ずナイル河の西へ葬るを常として居たのである、然れば則ち、印度人が、死後の生所なる極樂淨土を、實に西方なりと思ひ

定めて居たのも、亦是、死ぬるといふ事と西といふ事とを、相關聯せしめて居たのに由るのであると思はれる云々と、いふて居るのであるが、此事がまた決して、世間に於ける學者のみのいふ事ではなくして、眞宗七高僧の隨一たる道綽禪師の安樂集の中にも、これと同じ樣な敎が說かれてある、卽ち其下卷に示す所を拜見するに、閻浮提卽ち此世界に於ては、日の出づる所を生と名け、日の沒する所を死と名くるを以て、神明は、死を敎へ未來を敎ふるに、西に在て應趣するを便利とす、此を以て阿彌陀佛が、御淨土を西方に構へたまひたるも、盖し是、西へ々々と想の傾ける一切の衆生を、皆悉く一手に引受けたまはんが爲の善巧である云々との事である（取意）

七

さりながら文字に拘はり語に泥む時は、大なる誤でありて、無理に體を西方に向け、草鞋を穿いて旅立ちする思になつたなら、大なる間違であるといふ事は、今更云ふ迄もないのである、盖し、凡て其が身體の上の事であるではない、實にこれ心の上の事であると知らねばならぬのである、維摩經には「其心淨きに隨て則ち佛土淨し」と說かれてありて、心が汚れを離れ、淸らかに澄み渡りて見れば、此世界が實に極樂淨土と顯れ來るといふのである、この故に釋尊は實に、御心の澄み渡りたまひつゝあらせらるゝ上から、此世界をこれ御自身の御淨土なりと說かせられ、我此土安穩と宣はせられてあ

る、其故に我等の心若し釋尊の御心の如く、澄み渡るに至つたならば、疑もなく此世界、此天地の上に、極樂を見、淨土を樂む事も出來得るのではあらうけれども、悲しきかなや、我等の心未だ此位置に達する事が出來ずに居る、隨て此世界を、直にこれ極樂なり、又これ淨土なりと見る事が出來ぬ譯になりて居るのである、此故に、我等よりせば、所謂極樂も所謂淨土も、此世界の上には無いのであるといふ事に決着せねばならぬのである、然り、我等より云ふ時は、極樂も淨土も、此處に在るのではない、若夫れ然らば、勢ひ此を他所に置かざる可からざるに至る譯でありて、此を他所に置くといふに就いては、何處に置くべきかといふに、釋尊は之を西方と定められたまひたのであるが、其西方と定めたまひたる、思召如何と伺ふ時は、恐くはこれ、前述の如き、譯の者であつたよなと伺はるゝのである、

第二項　阿彌陀佛の穿鑿

一

次に世人の問はんとする所の者は、阿彌陀佛てふ尊き佛が、何處にも見付かりませぬといふ事であると思はれる、さりながら、今この阿彌陀佛を見たてまつらんとするに當て、己が肉眼に見えぬ抔といふ樣な、淺墓な考を持つて居ては、到底見たてまつり得る者では

ないといふ事を、辨へて居らねばならぬのである、我等は、己が肉の眼を、餘程慥かな者の樣に考へては居るけれども、こんな不完全な者はあてになるではないのである。

龍樹菩薩は大智度論の中に、我等の肉の眼の、欠點を知らしめて、

一、近きを見れども遠きを見ず、

二、前を見れども後ろを見ず、

三、外を見れども內を見ず、

四、晝を見れども夜を見ず、

五、上を見れども下を見ず、

等と宣はせられてある、見よ、こんな眼で、佛を見たてまつらう抔と思ふのが、大なる間違であるといふ事を知らねばならぬのである。

二

古の時、盲人の學者として有名なりし塙保己一は、或夜、弟子を集めて書物の講義をなしつゝあつた時、圖らずも風の爲に燈火が消えた、弟子等は乃ち書物を見ることが出來ぬやうになつた、そこで其事を告げて、先生暫く、御待ち下さる樣にと乞うた、盲人たる塙保己一は之を聞いて、ナニ、燈火が消えて本が見えぬトナ、さては眼明きといふ者は不自由の者であるよと、云ふたとの事であるが、慥に一應、之を承認せねばならぬのである、卽ち眼明きは、眼あるが爲めに燈火を要し、眼あるが爲めに本を前に控へて居らねばならぬ樣

になつて居るのであるが、塙保己一は、盲人であるが爲めに燈火を要せぬ、盲人であるが爲めに本を要せぬ譯となつて居るのである、

夫れ此の如くして、塙保己一の身になりて見れば、明るいといふ事と暗らいといふ事とが、同一になつて居るのである、即ち明るいから見えるといふでもなく、暗らいから見えぬといふでもない、明るくあらうが、暗くあらうが、何の區別はなく、實に明と暗とが行き拔けになつて居るのである、而して又、書物の有ると無いとが同じ事になつて居て、有と無とが相通して居るのである、この書物なくして能く讀むことを得る底の識見あり、暗き所に於て能く見ることを得る底の心眼あるにあらざれば、決して々々々、能く阿彌陀佛を見たてまつることを得るではないのである。

若夫れ、肉の眼に見えないから無いと決するといふならば、差當り己等自身の、心といはるゝ者を、如何に考へて居るのであらうか、心これ、色あることもなく、又其形あることもなく、重みもなければ長さもない、見やうとして見らるゝ者でもなければ、押へやうとして押へらるゝ者でもあるではない、けれども尙且つ己自ら己が心を、慥に有りと承認して居るではないか、然れば則ち、何物もその有るべきの理を味ひ得たならば、たとひ肉の眼には見えずとも、見えぬまゝに其が有るのであると信ずるに至らねばならぬのである、これが卽ち信仰と云はるゝ者であるので、阿彌陀佛を信じたてまつる

には、これだけの用意がなくてはならぬのであると思はれる。

三

更に譬へて云ふならば、盲人が太陽の存在を信ずるが如き者でもあらうか、卽ち身を日蔭に置くならば、其處に冷氣を覺ゆるに至つて、兎角不快を感ずるに至る譯から、眼明きの者に敎へられて、身を一たび日向に置く時に、其處に溫まりを覺ゆるに至りて、大に心持ちも善いと感ずるに至るとせば、たとひ身は盲目であるが爲に、太陽を見んと欲して見ることもならず、之を押へんと欲して押へる事もならずとはいへ、兎に角其處に、我身を溫ためたまふ所の、或尊き一物があるといふ事だけは、堅く信ぜらるゝに至る者であると思はれる、而して斯く一たび之を信じたる上からは、たとひ其處に或學者來りて、其はあやまりであるよといひ、又は或權威ある人來りて、其は間違であるよと、いひ聞けて吳れたればとて、其が爲に、決して己が心の動くといふ事があるではない、蓋し是、己が實感に基ける信仰なるが故であるので、其堅きこと、實に金剛の如しと譬へらるゝ所の者であると思はれる。

夫れ此の如くして、一たび此堅き信仰に入りたる上に、更に眼明きの人に依て敎へられて、太陽の色は赤くあるよ、其姿は圓くあるよと聞かさるゝ所に、さては斯くあるかよと、能く之を承認して、其處に諸種の觀察をなしつゝあるといふ事が、またこれ信仰の上に生

し來る所の、快樂といはるゝ者なる譯である。

四

阿彌陀佛の信仰といはるゝ者、實に此の如き模樣振りに於て生せしめらるゝに至るのである、卽ち我等若し、たゞ己一人のみの生活と思ひつゝ、心を日蔭に置く時に、其處に寂しさを感じ、其處に暗黑を患ふる思ありて、兎角不快に堪へざる譯の者であるに、其處に阿彌陀佛の本願大悲の、御喚び聲を聞く事を得て、心を一たび其日向に向くる事ある時に、其處に自ら賑かさを感じ、其處に一大光明を認め得て、大に安心の思ある事を得、大に愉快の念ある事を得るに至るべくあるのである、而して斯く一たび之を味ひたる上からは、

たとひ或學者來りて、其はあやまりであるよといひ、又或權威ある人來りて、其は間違であるよと云はうとも、其が爲に決して己が心を動かすの思があるではない、蓋し是、己が實感に基ける信仰なるが故であるので、其堅きこと、實に金剛の如しと譬へらるゝに至る者であると思はれる。

夫れ此の如くして、一たび此堅き信仰に入りたる上は、更に敎ふる人に依て聞かしめられて、阿彌陀佛の御德は此の如くあるよ、其御悟は彼の如くあるよと、敎へらるゝ所に、さては斯くあらせたまふかよと、能く之を領納して、其處に諸種の觀察をなしつゝあるといふ事が、またこれ信仰の上に生じ來る所の、法味樂といはるゝ所

の者である。

第三項　他力廻向の信

一

さて然らば、其阿彌陀佛に對する信仰てふ者は、如何なる味の者であらうかといふに、其が他力的の者であつて、阿彌陀佛の方から與へらるゝ所の者であるといふのである。

通例、世に云ふ所の信仰なる者は、己自ら己が心を勵まして、其處に信仰と名けらるべき心的狀態を、自ら造り出すべくあるのであ

るが、其は自力の信と名けて、我宗に敎ふる所の其とは、大に異りて居るのである、其故に、たとひ己が心が、尊くならうが、殊勝にならうが、又は阿彌陀佛の御慈悲を喜ぶ思にならうが、明け暮れ念佛を稱ふる心にならうが、そんな心が凡て役に立つではないといふのである。

二

そは何故であるかといふに、蓋し我等の心は、素と是、ノンベングラリンの者であり、相手次第に、誘はれ次第に、變り〳〵て行くのであつて、泣くも笑ふも卽ち其である、看よ何人であらうとも、己先づ態度を定めて、日曜日は泣くべきの日、月曜日は笑ふべきの

日、今日は怒る日、明日は悲しむ日など、きめてかゝつた事はあるまい、日曜日であらうが、月曜日であらうが、今日であらうが、明日であらうが、笑はにやならぬ樣なをかしな事が、眼の前に顯はれて來たから、笑ふまいとは思ひながらも、笑はせられて笑つて居る我心、又は泣かねばならぬ樣な出來事が起りて來たから、泣くまいと思ひながらも、泣かせられて泣いて居る此心であるではないか、而して又其泣くも一時、笑ふも一時、相手が變れば、思が變る、相手次第に、ぐるり〳〵と、變り〳〵て行く此心に、どんな事を思定めて見たればとて、其があてになるでもなければ、又其が其人の常の思振りであるぞと、定めらるべくあるでもないからと云ふのである、卽ち知る、喜ぶ思も役に立つでもなく、念佛稱ふる思も、取上げ得べくあるのではない、一切があてにならぬ我心と味はねばならぬのである。

三

隨て我等は、己自ら己が心の行末を、請合ふ事もならず、保證することもならず、又は豫定する事もならぬのである、卽ち今日の心が果して明日まで續き行くべくある者やら、今月の心、今年の心が、來月又は來年まで、變らずにあるべき譯の者やら、相手の模樣に依り、誘引の工合に依るのであると、いうて置かねばならぬのである。

文學博士中村正直翁は、或時、監獄に臨まれて敎誨せらるゝ樣に別して阿彌陀佛の信仰の一斑を叙す

は、己も亦何時捕はれて、此監獄の中に繋がるゝに至らぬとも限らぬのであるから、其時は何分宜しく賴むぞよといふ意味の語を、洩されたといふので、其事が當時の新聞紙上に書載せられてあつたのを、讀んだ覺えがあるが、これを一應考へて見ると、翁は甚だ怪しき事を述べられたる者の如くも見えるのである、卽ち翁は、翁自身に何か善からぬ事を計畫せられつゝありて、其がやがて露顯すべくもあるであらうとの案じ心から、吾知らず斯くも自白せられたる者でもあらうかなどゝ、疑ひ得る譯もないのではなからうが、決してそんな譯の者であつたのではない、畢竟これ、我等の心の本質を押へて見れば、相手次第に變り行く譯から、己自身に己が心の行末を、請合ひ得るではないといふの、眞理の上から、斯く申述べられたる者であつたと味はねばならぬのである、卽ち其處に尊き敎訓が籠められてあるので、我等は其敎訓を玩味するに至らねばならぬのである。

あゝ己自ら請合ふことのならぬ此心、たゞあやまり果てゝ、己が心の直打なき事を知り、人は如何にあらうとも、己だけは自力の無功なる所以を合點し得て、こゝに只管に、他力に縋りまゐらするの思を起さずには居られない樣になるのである。

四

さて又他力に縋るとはいへ、己が心を勵して、以て縋るといふの別して阿彌陀佛の信仰の一斑を叙す

ではない、蓋し前にも申述べた如くに、此心素と是、いつまでも請合はれ得る譯の者でもないと同時に、又其が決してあてになる者でもないのである譯から、たとひいかほど熱心に此心で縋りまゐらせたればとて、其が決して役に立つのではないのである。

古の時以來今日に至るまで、多くの人が、兎角誤解を招いて居たのは、卽ちこゝであつたので、彼法然上人の門下三百八十有餘人の中に於て、眞信仰に住し得たる者は、僅に五六輩にだにも足らなんだといはれてあるのも、蓋しこゝを味ひかねたに由るのである、

要するに、他力を信ずるに自力を以てするといふのでは、其が卽ち半自力半他力の者となるのでありて、未だ眞に自力を離れ得たといふではなく、實に是、「他力に縋る自力の信」となつて居るのであるから、是蓋し、我宗に敎ふる所の者とは違ふに至るのである。

五

我宗に敎へらるゝ所の信仰なる者は「他力廻向の信」と名けられつつありて、佛の方から與へらるゝのであるといふのである、故に宗祖は、信卷の別序に「信樂を獲得することは、如來選擇の願心より發起す」と宣ひ、蓮如上人は「信ずる心も、念ずる心も、阿彌陀如來の御方便より、おこさしむる者なり」と宣はせられてある、實に信ずるまでが他力であるといひ、念ずるまでが他力であるといふのである。

別して阿彌陀佛の信仰の一斑を叙す

夫れ此の如くして、凡てが他力であるといふに就いては、人多く此に於て進退に窮するに至るのである、蓋し、若夫れ信ぜんと欲し、念ぜんと欲するならば、そこに自ら自力的の努力が加はる譯となりて、排斥せらるゝのであるし、さりとて又、之を捨置くといふ事であるならば、終に、信仰に入るの時はないのであると、思はるゝに至るからである、あゝ我等は、之を捨置いて墮獄の苦痛を忍ばねばならぬのであらうか、然らざれば之を信ずべく努め、之を念ずべく勵んで、兎に角自力の信にもせよ之を養ふを以て滿足するに、至らねばならぬのであらうか、或は又此等二種の方法を外にして、何處にか、他力廻向の信を、領納せしめ得らるゝの途があるのであらうか、請ふ之を次項に於て、承り申さんと欲するのである。

第四項　阿彌陀佛の念力

一

人は常に己が腕前のみを眺めて、其處に己惚れて居るとはいへ、若も一たび他力を味ふに至るならば、一切が他力ならざるはないのであつたと、知らるゝに至るのである、看よ、最初我等が、此世に生れ來る時、其が實に兩親の他力に依るのであつたのである、卽ち

別して阿彌陀佛の信仰の一斑を叙す

身體髮膚之を父母に享けたる者であり、父母の前に坐りたる時、其父母より、與へられたる者を外にして、そこに我物と押ゆる何物もあるではないのである、而して育てられたも親の恩、衣食住を與へられたも、又同じく然る譯であつたので、或は知識を貯へ、或は學問を修め得たとするも、又是師匠の學問師匠の知識が、映り來りて、宿り呉れたる者に外ならぬのであつたのである、其他或は諸種の感想の起り來る所以、皆是外界よりの刺撃に依らざるはないのであつたので、暑いと思はせられて暑いと感じ、寒いと思はせられて寒いと思うて居るに過ぎぬのであつたのである、古の時彼ニュートンは引力を發明したといふので、人は大に之を驚嘆した譯ではあつたが、其とても、林檎がニュートンの前に於て說法して、此通りなるぞよと、枝から下に落ちて見せなんだならば、彼も決して悟り得らるゝ譯の者ではなかつたのである、乃ち知る、ニュートンの發明も、又是、外界に於ける林檎の敎訓が、映り來りて、印現したる者に外ならぬのであつたといふ事を。

二

今更に一歩を進めて之を云はんに、若夫れ外界に、何物も無かつたとすれば、どんな思が起るであらうか、何物かゝ其處に置かれてあればこそ、之を見聞して、或は之を善しと思ひ、或は之を惡しと思ふなる、諸種の思想が起つて來るのでこそあれ、何物も無いと

ふのであるなれば、其處に、善いといふの思も起るでもなければ、又惡いと思ふの心も生じ來るのではないのである、此故に若夫れ、其處に何等かの思想が起りて居るといふならば、凡てこれ外界の事物が印現し來りたる者を、唯其通りに之を承認して居るに外ならぬ者であつたと、知らるゝのである、卽ちこれ、一切が他力に依るのであつたと云ひ得る譯であるのである。

三

夫れ此の如くして、我等の心の中に、常に起り來る所の諸種の要求も、亦是故なくして起り來る者であるのではない、必ず此要求を起さしむる底の刺擊が、絶えず外界より與へられつゝあるに由るのであると味はるゝのである。

中に就て、我等若し、生の問題幷に死の問題に觸るゝ時、其處に必ず寂寥を感じ、不安の念を生じ、暗黑を辿りつゝあるの思ありて自ら堪へ得ざる所に、其處に光明を要求し、安心の思あるに至らんことを希ひ、常に賑かさを望んで已まざる者、これ果して何の故に由るのであらうか、盖し是、其處に、我を招いて已みたまはざる、尊き喚び聲ありて、我心の上に、絶えず、强き刺擊を與へたまひつつ、ありて降さるゝに依らずんばあらずと、味はるゝに至るのである、之を起信論の語に隨へば、これを內熏力といふて居るのであるが、これぞ卽ち、我尊き阿彌陀佛の念力なる者であるのである。

四

夫れ此の如くして、我心の内面よりは、阿彌陀佛の念力に依れる尊き御育てを受け、之に加ふるに外界よりは、諸種の傳道、幾多の敎訓、數多き刺擊、尠からぬ暗示等を與へられつゝ、内外相應せる溫き御惠みの懷の中に養はれて、こゝにどうあつても信仰の芽を生せしめらるゝに至るのである。

五

あゝ尊い哉、内外相應の御惠み、我等は之を捨置かんとして捨置く事が出來るのではない、又此等より獨立して、自力的の努力をなし得るのではない、此故に今迄は己が努力と思ひ居たる事、其が實は他力の誘引に依るのであつたのである、之を捨て置かんとして、捨て置く事のならなんだのが、其が佛に依つて招かれ居たる譯に依るのであつたのであると、味はねばならぬのである、忘るなよ、我等は常に佛に懷かれて居る佛の子であると同時に、念力は常に來りて我等を溫めて降されてあるのであるといふ事を、而して又其が或は之を内面よりし、或は之を外面よりしたまひつゝあつて降さるのである、斯くして此世界はこれ、佛が我等を救ひたまふの舞臺であつたのであるよ、又其一大道場であつたのであるよ、

第五項　佛心凡心一體の眞意義

一

我等は內外想應せる溫き御惠みに養はれて、そこに他力御廻向の信仰を賜はるのでありて、信仰なる者は、佛心の印現に外ならぬのであるからは、己が心を鍛へて自ら信仰を造り出すのではないといふ事、前來屢々之を說けるが如くではあるけれども、さりとて又信仰なる者は、

一、特り佛のみ在して、佛心のみに依て之を造り得る者でもなければ、

一、又特り凡夫といはるゝ我等のみありて、凡心のみに依て、能く之をこしらへ得る者でもないのである、

といふ事を味ふて居らねばならぬのである、若夫れ佛心のみなりとせんか、これをこれ佛心とこそはいへ、名げて之を信仰と云ひ得るではない、若夫れ凡心のみなりとせんか、これをこれ凡心とこそはいへ、また名けて之を信仰と云ひ得るではない、信仰なる者は是非に、佛心と凡心との二が、打解け合ふて、一體となつた者であらなければならぬのである、然り、二つの心が、打解け合ふて、一體となつたのをいふのであるよ、

二

別して阿彌陀佛の信仰の一斑を叙す

然るに世にはこゝに誤解を起して、己が心は餘りに汚れたるが故に、此心を振捨てゝ、別に佛の善き心を貰ひ受けて、以て之を己が信仰となし、この信仰が佛果を得せしめらるべくあるのであるといふ樣に思ひなして居る者もある樣ではあるが、其は大なる間違であると云はねばならぬのである、若し斯樣な譯であるといふならば、其は佛が佛を助けたまふ者でありて、佛が我を救ひたまふ者ではない、そんな佛は、我に於て關係はないのでありて、毫も有り難くもなければ、又決して嬉しくもないのである。

譬へば、我家の悴は、道樂息子でありて、到底家督を相續せしむるに足らぬといふ譯から、他より善き養子を迎へ取りて、財産悉皆を讓るといふた樣な譯で、家名は立派に相續せらるゝであらうが、其捨てられたる道樂息子はどうした者であらうよ、思ふに、己が身の立ち行くべき途があるではなくて、たゞ山野に露宿して、遂に飢ゑて死ぬるより外に途はない譯となるので、あるではないか、かゝる境遇に置かれたる道樂息子は、決して救はれたる者でもなければ助けられたる者でもあるではないのである、然れば則ち、其道樂息子の心の中には、常に恨みの思こそあれ、所謂感謝の念の起り來るべき筈はないのであると思はれる、

我宗の信仰は、此我を、彼道樂息子の如く扱ひて、之を放逐し、之を勘當するといふのではない、其道樂息子を慥に救ひ上げて、以

て其者に、立派に家督を相續せしむる底の味を、持てる者であるので、此汚れたる我心が、決して〳〵捨てらるゝのではないのである卽ち此心が能く取扱はれつゝ、其處に此我が慥に救はるゝに至るのである、そこに佛心凡心一體てふ妙趣が味はるゝに至るのであるから、善く此間の消息を、承り申すの思なくてはならぬのである。

三

然るにこゝに又、一種の誤解に陷らざるを得ない樣な模樣がある卽ち我心を捨てるでもなくて、其處に佛心の印現を仰ぐといふ事から、

一、佛心を佛心として理解し、

一、我心を我心として扱ひつゝ、

以て佛心と凡心とを、兩々相對立せしめて居る者もある樣であるが其では、佛心凡心一體の信と云はるゝ者ではなくして、其は慥に、佛心凡心二體、若くは佛心凡心合體といはるゝ者になつて居るのであると思はれる。

譬へば世に所謂寄留といひ、同居といはるゝ者が卽ち是であると思はれる、若夫れ表面より之を眺むれば、一の家庭の中に、たゝ多くの家族が群がれるが如く見えて居るとは云へ、實は同居人が居るのであり、寄留者が住へるのであるといふ上からは、たとひ同一の場所に居並んで居たればとて、其竈は別であり、其財産は二ツであ

ると云はねばならぬのである、此故に或時期の間は、同一家屋の中に在て、相共に睦く暮し行くとはいへ、やがて相別れる時節がある者と見ねばならぬのである、

若夫れ我心の中に、佛心の寄留を希ひ、其同居を仰ぎたてまつりて居るといふの分齋であるならば、たとひ平素、平穩無事の時に於ては、佛心と凡心と相親しく睦み合ひて、仲善く暮して居る樣に見えては居るとも、素ト是、寄留であり、同居であるからは、やがて相分る〻時節がある者と見ねばならぬのである、其がいつの時であらうかといふに、恐くはこれ死の時であらうと思はれる、卽ち正しく命終らんとするの時に於て、二者相分れつ〻、佛心はたゞ獨り極樂淨土に御還りなされ、我心は置き去りに遭つて、其處に悶えに陷らねばならぬ樣な譯ともなるのであらうと思はれる、あゝこれ、危險なる信仰であると云はねばならぬのである、凡そ二體、合體、寄留、同居的の信仰は、是非にこゝに至らねばならぬのである、今我宗に敎ふる所の其は、斯の如く危險なる者であるのではない、我宗の其は、實に佛心と凡心とが打解け合ふて、正に一體となれる所の者をいふのであるよ、

四

若夫れ然らば、佛心凡心一體の信といはるゝ者は、果して如何なる者をいふのであるかといふに、曰く、しつらはるゝのである、蓮

如上人の御一代聞書に曰く、

一、衆生をしつらひたまふ、しつらふといふは、衆生の心をそのまゝおきて、善き心を御加へ候ひて、よく、めされなし候、衆生の心を皆取替へて、佛智ばかりにて別に御したて候ことにてはなく候。

と、看よ其處に、「衆生の心を其儘置きて」と宣はせられてある、即ち我心を放逐するのではない、之を勘當するのではない、故に此心を捨てゝ別に善き養子を迎へんと欲する底の、意氣込があるのではないといふ事を味ふて、先づこゝに一たび我心に安心さするの思がなくてはならぬのである。

さりながら又此我心を、單に我心として別立せしめて置くといふでもなく、そこに又彼佛心と、單に居並ばしめて、以て寄留同居的の取扱をして置くといふのでもない、次の御語に、「善き心を御加へ候ひて、よくめされなし候」と仰せられてあるので、善き心といふのは即ち是佛心をいふのであるから、蓋し佛心が我心に御加はり降さる事をいふのである、而して同時に、我心が善くせられるのであるといふ事を味はねばならぬのである。

譬へば澁柿の如き者であらうか、澁の其儘であつては、到底食せられる譯の者ではないが、さりとて之を甘柿にするには、其澁を除いて、別に甘味を注ぎ入れるべくあるのではない、澁の澁きを其儘

置きて、其が能く日光に照らさるゝ所に、其處に澁柿がよくめされなすに至つて、こゝに卽ち澁柿は一轉して、甘柿となさるゝに至るのである、今若し我心を除き去るとすれば、蓋し佛の救ひたまはんとする主體を失ふに至るのであつて、其處に御救ひてふ事は、意義を爲さゞるに至るのである、此故に我心は、どうあつても、其儘置かるべくあらねばならぬのである。而して其處に、佛心が御加はり降さる所に、この我心が、よく、めされなすに至るのである、よくめされなすといふは、外ではない、從來は暗黑的の者であつたのがこゝに一道の光明を認め得る譯ともなり、古はたゞ、不安の念にのみ充されつゝありたりし者が、今は其處に安心の思あらしめらるゝに至るのをいふのである、而して又そこに所謂煩悶の世界は消え去りて、別に新に歡喜の麗はしき天地が、迎へらるゝ樣な譯となるのを云ふのである。

五

以上の事、素と是、心の上に屬するのであるといふ事を、知らねばならぬのである、若夫れ此が身體の上の事であるならば、其が有形的の者である譯から、如何に睦じき間柄なりとはいへ、二人以上の身體が、相融じて一となるといふ樣な事のあるべき譯はない、其がたとひ親子の間柄なるにもせよ、又は其が假令兄弟姉妹の關係なるにもせよ、二人は飽迄二人、三人は飽迄三人であらねばならぬと

いふ事は、今更云ふ迄もない事であると思はれる。

さりながら心なる者は、元來無形の者であるからは、二人の心も又は三人、五人、百人、千人の其も、打解け合ふて、一となる事を得るに至るのでありて、自然、彼佛心と此凡心とも、又能く打解け合ふ事を得べくある譯から、そこに二者相融じて一となる事をも得るに至るのであると思はれる、

如何にせば二つの心が打解け合ふて一となる事を得るのであるかといふに、曰く、たゞ贊成し、同意し、一致するのみの事である、譬へばこゝに甲の人あり、相共に某所に行かんと欲して、乙の人を誘ふ時、乙は之を斥け、我は他所に行くべき先約あるが故にと云ひ

つゝ、之を斷り出でたりとすれば、其處に甲乙二人の者の心は、相分れて、一は東に、一は西に、其行く所を異にするに至るのであるとはいへ、若夫れ、其乙の者が、其甲の云ふ所に同意し、贊成し、一致したりとすれば、そこに甲乙二人の心は、相互に打解け合ふて一となつた者であると思はれる、其證據には、其處に必ず、二人相共に同時に歩み行く譯ともなり、途中若も曲るべき場所に來るならば、必ず二人相共に曲り、若も眞直に行くべくある所に於ては、屹度二人相共に眞直に行くべくあると知らるゝのである、あゝ心と心とは、必ず相合ふ事を得る者でありて、又其相合ふたる上の妙趣は、頗る味深き者であると思はるゝのである。

別して阿彌陀佛の信仰の一斑を叙す

六

更に一段深入りして之を云はんに、我れ若此理に依て、盗賊の云ふ所を聞き、以て其云ふ所に同意し、賛成し、一致したりとすれば どうなるのであらうかといふに、申すまでもなく、我れ亦其處に盗賊と云はるゝ者となるのであるといふ事に、間違はない筈であると思はれる、而して彼盗賊が、捕はれて監獄に行く場合には、我亦相共に、監獄に行かねばならぬ譯となるといふ事も、亦是、明なる譯であると思はれる、蓋し是、心と心とが相合ふて一となつても居るのであり、同時に又其業因が相揃うて同じ者となつて居るといふ譯にも依るのであると思はれる、蓋し是、因同じければ、果亦同じかるべくあるといふのが、天理の約束なるが故であると思はれる。

七

さて此の如くして、今は彼盗賊と心を合せて、之を一にせよといふではない、彼尊き阿彌陀佛の御心を承りて、其御心に同心させて頂き、能く打解け合はさして頂くならば、彼阿彌陀佛が佛であらせらるゝからは、この我も、其處に確に、佛たらしめらるゝに至るといふ事に於て、疑ひはないのであると、味はるゝのである、而して又、佛は常に極樂淨土に、御住まひなされてあるといふ譯から、此我も亦必ず、極樂淨土に住まはしめらるゝに至るのであるといふ事も、亦是明なる譯であると、尊まるゝに至るのである。

八

以上、實に是、我宗に敎ゆる所の信仰なる者でありて、是をこれ佛心凡心一體の信というて居るのであるが、さてこゝに至りて、どうしても踏み行くべき道順は、

一、佛としては能く、凡心といはゞ此我心を會得して降さるといふ事、

一、凡夫たる我れとしては、能く佛心を會得させて頂くといふ事是であると思はれる、卽ち佛凡相互の會心といふ事が、大切の中の大切なる事であると、味はれるのである。

第六項　佛凡相互の會心

一

阿彌陀佛としても、能く我等の心を會得して降され、我等としても、又能く阿彌陀佛の御心を、會得させて頂く所に、其處に所謂、佛心凡心一體と名くる所の、信仰なる者が生ずるに至るのであるがさて其阿彌陀佛の御心といふは、蓋し是、御慈悲のかたまりであり我等の心といふは、これ罪惡業障のかたまりであるのである。而して此罪惡業障の我心を、特に哀愍攝受して降さるのが、實に彼阿彌陀佛の御なさけであるので、此間の消息は、世界中、たゞ、親と子

別して阿彌陀佛の信仰の一斑を叙す　一〇一

との間に於ける心理作用の上に於てのみ、之を擬へて味ふことを得るのである。

我家に常に出入りしつゝある某あり、朝夕來りて口癖にいふ樣、「凡そ世の中に於て、我子に如く者があるではない、其譯は、如何程小言を云ひたればとて、我子は決して他へ逃げ行くといふ事をせぬ、之に反して、他より預りたる弟子等に就いては、常に其虞ある事を思ふて、餘り多く叱る事をもせぬ云々と、誠にこれ味ふべき言であると思はれる、實に又、子としては、親を離れて他に行くべき場所があるではないから、自然、親をのみたよりとするに至るのである、たとへば奉公をするといふにもせよ、又は勤めをするといふにもせよ、親の聲の懸からぬ以上は、何人も之を引受けて呉れるものでもなければ、又は之を世話して呉れるものでもないのである、此故に子としては、常に絶えず親のそばにのみ在らん事をこれ希ひ其處に安心の思を持ち、其處に賑かさを感じて居るのであり、親としては、實に能くこゝを見て居るのである、其故に、自然、子を信ずること、斯の如く厚きに至つて居るのであると思はれる、これ蓋し、子の心を能く會得せるの親心と、いふべき者であると、思はれる。

二

同時に又、子としても親を信ずること、頗る厚き譯の者であるぞ

別して阿彌陀佛の信仰の一斑を叙す

と知らるゝのである、蓋しこれぞ我眞實の親ぞと思知られたる以上には、たとひ其親が、如何に直打なき者であらうとも、其親を捨てて、之を取替へ、他の善き親を持たんと欲する抔の思のあるべき筈はないのである、詳しく云はんに、たとへば其親が貧乏であるにもせよ、無學の者であるにもせよ、又は老いぼれて、もうろくして居るにもせよ、其が其儘、有難いのでありて、これをどうしやうといふの思もないのである、其が彼乞食者の子を見ても思知らるゝに至るのである、卽ち之をはたから見ては、如何にも可哀想であるといふ譯から、オ前にこんな親を持たせて置かずに、今之を取替へて、他の善き親を持たせて遣らうぞよと、云ひたればとて、彼が決して其を喜ぶべき筈ではないのであると、知らるゝのである、これ蓋し子として能く親を思ひ、又實に子として能く親なる者を、會得し得て居るのであると思はれる。

三

あゝ親は子を會得し、子は親を會得し、互に能く會得して居る親と子との間柄は、何たる不思議の情愛の、相通ぜる者であるよ、世には時ありて、親と子と一時の爭ひをなし、今日限り親子の緣を切る抔と、言ひ募る者もある樣ではあるが、是唯、熱に浮かされたる上の、一時的の戯れ語であるとしか思はれない、然り、親と子との緣が、どうして切られる者であらうぞ、親子の緣は天然的に結ばれ

て居るのでありて、之を切らうとして切られる者であるのではない隨つて、親しからざらん事を欲したればとて、親しからざるを得ないのである、かゝる親しき間柄ぞと味はれたる上の親と子と、相對して坐りたる時の味は、蓋し言語の能く之を說き明かし得べきではない、又は文字の能く之を書き顯し得べきではない、唯、各自々々に之を味ふといふより外は、ないのである。

四

最初釋尊が、彌陀法のうまみを、御弟子方に說いて御聞かせなさるゝ時、實にこゝの味を以てせられたので、あつたのである、卽ち彌陀を信ずる味といふは外ではない、親と子と相對して坐りたるのうまみであるよと宣はせられたのであり、梵語に之を「プラサーダ」といふのである、而して實はこの「プラサーダ」の味、卽ち親と子と相對して坐りたる上の味は、是實に、言亡慮絕の所であり、是實に四句百非を絕して居る所であるので、言はうとして言はれる者であるのでもなく、說かうとして說かれる者であるのでもないけれども、飜譯の三藏、康僧鎧法師は、これを强ひて支那の語に直して、これを「信心歡喜」の四文字で映して降されたのである、此故に、信心歡喜といふは如何なる味であるぞといへば、蓋し、親の前に坐りたる味をいふのであつたのであり、又その、親の前に坐りたる味はといへば、これ蓋し信心歡喜の味をいふのであつたぞと、の

いいまるゝに至つたのである、あゝ「信心歡喜」と「プラサーダ」、「プラサーダ」と「信心歡喜」雙方互に助け合ひて、以て信仰の妙味を示して居るのである、語を換へて之を云へば、蓋し是、親と子とが心と心とを、會得し合ふて居るの味であると云はるゝのである卽ちこれ、佛凡相互の會心といはるべき者であるので、實にまた、我聖人の味ひたまひたる信仰其者であつたのである。

第七項　無條件の信賴

一

阿彌陀佛の信仰は、佛心と凡心との融合、雙方の會得であるといふ事、既に之を說けるが如くであるからは、其處に孰れの方からも或は條件を持出し或は注文を差出す等の、隙間などのあるべきではない、實に相互に於ける、無條件の信賴であると云ひ得るのである然り、阿彌陀佛の方からも、我等に對して、男女老少を選ばず、智愚賢不肖を問はず、善人は之を善人のまゝに救ひ、惡人は之を惡人のまゝに助くると、呼びたまひて降されてあるのであるから、この大慈悲の前には、洩るゝ者が一人もあるではないのである、而して又、この呼び聲を承り得たる我等の方にも、何等の注文を持出すなどの餘裕があるではない、たゞどうなりともと、願力にすがりて

別して阿彌陀佛の信仰の一斑を叙す　一〇九

一切を佛意に任せ奉るより外はないのである、恰も是、孝子の父母に歸するが如く然る者であるので、眞に親と子との間に於ける情愛は、實に斯の如くあらねばならぬ譯の者であると思はれる。

二

今之を子の方より眺めんか、若夫れ、こゝに一人の子あり、「父よ我を賞したまふは善し、我を懲したまふ事を已めよ、また我を撫でたまふは善し、我を打ちたまふ事なかれ」など、注文を差出すことありとせんか、これ恐くは、其子未だ眞に、親なる者を味はず、親の心なる者を會得して居らぬのであると思はれる、凡そ可愛の兒には旅をさせるといふが、親心であるからば、如何につらき事を命せらるゝとも、又は如何に辛苦を與へらるゝとも、其處に實に御慈悲は宿り、其處に實に御情けは籠る事を思ふ時、たゞ之を有り難く感佩すべきが、子たる者の心であらねばならぬ筈であると思はれる、

彼下野公助は、母に打たれて泣いたといふ事であるが、母が之を咎めて其泣きたる所以を質したる時、公助は答へて云ふ樣「從來幾度か母上は、御慈悲の上から此私を御打ち降されましたが、其度毎に必ず強き痛みを覺えて居りましたに、今日は更に其事が御座りませぬ、依ては思ひまするに、我大事の母上も、次第に年老いさせられ御力も漸く衰へさせられたに由るのであるかと思ひますれば、たゞ其のみが悲しくも御座ります、または殘念にも思はれまする……」

云々と、いふのであつたといふ事であるが、更に今この公助の心根を汲み取りて見れば、蓋し母のいつ迄も成るべく健全に在さん事を希ひ、若も懲したまふ事もある時は、飽迄も力強くありて、而も此身に痛みを覺ゆる迄に、打ちたまはらん事をと、希ひつゝあつた者であると、味はるゝのである、これ實に、子として親心を見たる上の眞情であらねばならぬのであると思はれる、あゝ此眞情ある所に、どこに、如何なる注文を、持出さんと欲する抔の思があるであらうか、たゞ其御慈悲にもたれて、明け暮れ、感涙に咽ぶの思あるより外は、なかるべき譯で、あらねばならぬのであると、思はれるのである。

我聖人が、彼阿彌陀佛の御慈悲にもたれたまひたる味が、卽ちこゝで、あらせられたのである、其であるから、何の注文どころか、何の條件どころか、たとひ念佛して、其が爲に地獄に墮つることありといふとも、更に後悔の念があるではないとさへ、宣はせられてある、これ實に信仰の極致であり て、信賴する事こゝまでに及んで居るのでなければ、決してうまみの嘗められる者ではないのである。

三

殊に又思ふに、念佛者は無碍の一道と仰せられてあるからは、念佛者たる者、たとひ或は地獄へ往かうが、或は餓鬼道又は畜生道へ囘はらうが、其處に直に無碍自在の働きをなさしめらるべくあるの

でありて、思のまゝに蹂躙し得るのであるのに、これをこれ思はずして、唯徒に、地獄を怖れ、又は故もなく餓鬼道畜生道等を恐るるの思があるといふならば、是未だ、無碍の一道といはるゝ、眞の念佛者たり得て居らぬのであると思はれる。

さりながらさりながら、阿彌陀佛の親心を伺へば、決して此我を彼三惡へ往かしめ樣と思召されてあるのではない、必ず慥に間違なく、我眞實の報土へ參らしめると、宣はせられてあるのでありて、其が本願の上に誓はれてあるのであるから、唯其御慈悲を信賴してひたすらに其處に打ちもたるゝの思あるのみであるので、是ぞ實に我聖人の信仰其者であつたのである、これをこれ、無條件の信賴といふのである。

四

眼を飜して、親の方より我子に向ふの味を眺むるとも、また同じく其が無條件の信賴であるといふ事が味はるゝに至るのである、卽ち親としては、我子が善人であるから可愛といふでもなければ、賢人であるから望みを屬するといふでもない、善人であるならば善人のまゝに、賢人であるならば賢人のまゝに、どうしても之を捨てる事がならぬといふのである、殊に親の心は御慈悲てふものでありてたゞ之を愛するといふのとは、其性質を異にして居るのである、蓋し、愛するてふ事は、憎むてふ事の反對でありて、己が心に契ひた

る者を愛するといふのであるから、愚者よりは賢人を、悪人よりは善人を、醜き者よりは美しき者を、汚れたる者よりは淨けき者をと選び取るに至るが自然であると思はれる、之に反して御慈悲てふ者は、低きより低きに向つて運ばるゝが、其持ち前であるからは、寧ろ賢人よりも愚者、善人よりも悪人、美しき者よりも醜き者、淨けき者よりも汚れたる者を、捨つる事能はず、忘るゝ事能はずして、其が爲には、己が身をも忘るゝにさへ至るといふのである。此故に「撫でしこの、花にかはりは、なけれども、おくれて咲くは、なほあはれなり」てふ思さへあるに至るのでありて、其處にどうして、あは條件であるの、或は注文であるの、といふ様な事を、持出して居らるゝ、遑などが、あるであらうか、唯ひたすらに、可愛くてならぬといふのである、即ち是、無條件といはるゝ者であらねばならぬのである。

五

彼尊き阿彌陀佛の思召が、即ちこれ是であるので、特に淨けき者をといふでもなければ、又特に賢き者をと宣ふでもない、一切善悪の凡夫人を、洩す所もなく救ひたまふのであつて、而も其が、御慈悲の上から、低きより低きに向はせられ、特に苦惱の者を憐んで降されてあるのである、其模様振りが、實に當流御本尊の御姿の上に顯れて御座るのである、即ち御本尊が御立ち姿であるといふこと、

別して阿彌陀佛の信仰の一斑を叙す

これ實に御慈悲の極みを、示させられて居るのである、卽ち是御心靜に落付いて御座らせらるゝ事がならぬといふの思召であるのである、あゝ我子の危きを見て急ぎ驚き立つの親心は、實にこれであらねばならぬのでありて、今我等の危きを、見そなはしたまふの佛心は、終にこゝに至らせたまふて降されたのである、唐の善導大師はこゝを、立撮卽行と宣ひて、立ちながら、すぐにそのまゝ、つらまへて行くの、厚き思召であると、御知らせ降されてあるのである。

以上、これをこれ、無條件の信賴といふのである。

第八項　祈ることなし

一

阿彌陀佛の信仰は、素と是、佛凡相互の會心でありて、互に心と心とが、のみこみ合へたる上から、其處にまた自ら、相互に無條件の信賴を、起し合ふに至つて居る譯で、こちらからは、一切を任せ奉りてもたれる思と、彼尊からは凡てを受取りて御護り降さるゝ思と、雙方融合一致せる所に、其處に何等の不安があるでもなく、また其處に何等の隙き間があるでもない譯から、たゞ雙方互に滿足の思のみありて、其邊に或は祈りを捧ぐるの、或は祈りを請取るの

別して阿彌陀佛の信仰の一斑を叙す

抔といふ事もない樣になつて居るのである。

これ實に珍しき事であるので、世に常に唱道しつゝある所を聞くに、宗教は祈りであるといひ、祈るを以て宗教の本質となし、祈らざるは宗教ではないとまでに、云ひなされてある樣ではあるが、奇にも不思議にも、阿彌陀佛の信仰中には、其が無いのである、殊に我聖人は、嚴しく之を禁じたまひてある、其には深き思召もある譯ではあるが、一應之を通俗的に解釋して見れば、凡そ左の如くであると思はれる。

二

祈りといはるゝ者は、如何なる場合に持出さるゝ者であるかといふに、多くは、病氣に侵され、災難に出遭ひ、又は失敗に陷りたる抔の時、或は又、惰けつゝありながら利を射らんことを希ひ、怠りつゝありながら立身せんことを欲する抔の場合に於てせらるゝ者であると思はるゝのである、若夫れ然らば、是實に、宇宙の法則を無視し、因果の理法を破りて、猥りに不正の果報を貪らんと欲する者であるので、其心これ甚だ濁れる者であり、其所作これ甚だ誤れる者であると、云はねばならぬのである、我宗に於ては、何事も自ら招ける業因の然らしむる所であると、敎へられつゝあるのであるから、まいた種子は報い來るが當前、植付けぬ者は實らぬが道理であると諦らめて居るので、强ひて之を神佛に祈りなどして、或は無理

に之を避け、或は無理に之を取來らんと欲する抔の事をせぬといふのである。

三

而して又、何處にか祈りを受取るの神あり、又は佛ありといふならば、其神、其佛は、亦是、天地の常道を踏超え、宇宙の法則を無視したまふ者であると思はれるのである、但し他の宗敎に敎ふるが如く、所謂全智全能の神なる者ありて、其神は、自ら法則を造り、自ら理法を定めたまひたといふ譯から、時ありては、己が思のまゝに法を動かし、又は理をも曲げ得るのであるといふならば知らず、佛敎中に敎ふる所の、所謂、佛といはるゝ御方は、自ら法を造りたまひたる者でもなく、又自ら理を定めたまひたる者でもなく、佛は法を以て師とするといはれて、法に依て敎へられ、法を悟りたまひて、法の中に在てのみ活動したまひつゝあらせらるゝのであるから其御方に對し奉りて、所謂法にはづれたる御願などを持出し、之を御相談にかける抔といふ事が、元來、相濟まぬ事であるといふのである。

四

然るに若も法を動かし、又は理を曲げたまふ御方があるといふならば、さういふ御方は、實にあぶなくありて、之を信賴する事が出來ぬといふ事になるのである、蓋し我等は一生懸命に勉强しつゝ

あるとしても、何時、其御方の爲に法を曲げられて、永き苦辛も、水泡に歸せしめらるゝ事がないとも限らぬといふ事であつては、我等は少しも落付いて居る事は出來ぬ樣になり、遂には何事も手に就かぬ樣な譯とならざるを、得ざるに至るのであると思はるゝからである。

五

殊に又其御方の心が、たゝいこちらからの持ち掛け樣次第に動くといふに至つては、實に危險千萬であるといはねばならぬのである、蓋し常に御機嫌伺をしつゝあるならば、必ず御目を懸けても降さるであらうが、若も御無沙汰でもして居るならば、遂に御罰をあてたまふに至りたまふかも知れぬ譯で、甚だ氣味の惡い御方であると云はなければならぬのでもあるのみならず、又さういふ御方であるならば、祈る者をのみ憐み、祈らざる者を捨て置きたまふに至るべきは勿論、同じく祈る者の中に於ても、から手で祈る者よりは、供物を捧げて祈る者に幸を與へ、同じく供物を捧ぐる者の中に於ても、多量に捧ぐる者に、心を注ぎたまふ譯ともなりて、こゝに、祈りを捧ぐるの仲間同士が、相互に競爭を試み、相互に睨み合ひをなしつゝあらねばならぬ樣な譯ともなるであらう、若夫れ然らば、今迄は折角睦じかりし間柄も、其が爲に不和を生ずる事ともなり、心暫くも油斷する事能はずして、結局、商賣よりも、仕事よりも、常

に祈る事にのみ忙はしき譯ともなり、而して其が又日々夜々、心配の種ともなり、苦勞の原因ともなるに至りて、其極所謂煩悶に陷り、懊惱に沈まざるを得ざるに至るでもあらうと案ぜらるゝのである。

六

而して又、たとひ惠みを與へて降されたとしてみても、御つかひ物次第であるといふならば、蓋し、御直段相當の返禮が與へらるゝのであるとも思はれて、其御方の御心が見透かさるゝやうでもあるのみならず、さういふ御方であるならば、時には其處に、直段の見積り違ひもあり、又は依怙の沙汰もあり、偏頗の嫌ひもあるべき筈と、見て置かねばならぬのである、斯樣な御方であるならば、向ふ樣からは、なんとおつしやつて降さらうとも、こちらの方から、平に御免を蒙りますと、申上ぐべき譯の者であると思はれるのである。

七

且つ又こちらの手許に就いて考へて見ても、祈りさへすれば、どんな無理なる注文でも契ふといふ事になつては、其處に、勉強も努力も、正義も公平もあつたものではない、といふ事になり了るのでありて、かゝる敎は、實に、道德的、文明的の宗敎としては、あるべき筈ではないと思はるゝのである、若夫れ、世にかゝる宗敎ありといふならば、それこそ、實に安寧秩序を妨ぐるの宗敎であるといふ

ひ得て、差當り我國の憲法第二十八條にも牴觸する者であると、いはねばならぬ樣にもなるのであると思はれる。

八

我聖人の敎へて降されたる所の信仰より云へば、決して祈ること、を、せぬのみならず、尙又無理に謹んで之をこらへて居るといふのであるのでもない、實に徹頭徹尾祈りなどを捧ぐべき餘地があるのではなかつたのである、其譯如何となれば。

若夫れ未だ信仰に入らざるの時、祈りを捧げんとすれば、佛は宣ふ樣、「われ汝の祈らぬさきに、常に汝を念じつゝあり、汝の祈るを待つて、後に初めて汝に往くのであるではないよ」云々と。

九

若夫れ然らば、信仰に入り得たる後に於て、祈りを捧げんとすれば、佛は宣ふ樣、われ汝を護りて常に汝の前に在り、われ暫くも汝に離るゝことなし」云々と。

十

あゝ何たる仕合せの我身の上であるよ、今こゝに信前の時といふ者、倩々之を思へば、遠き古の時以來、生々世々を經て、流轉輪廻の淵に沈淪しつゝありたりし其永き間を、これ云ふのであつたのである、今こゝに信後の時といふ者、蓋し是、こゝに光明的無量壽の命を與へられて、今より後、平和の生活に入らしめられつゝ、以て

未來永恒の末に至る者を、これ云ふのである、要するに、無限の古の時より、無限の未來の時に至る迄、苟も我ある所、そこに常に佛まし〳〵て、絶えず此身を護りたまふて降されつゝあるといふのである、あゝ常に佛と共たる事を得つゝあるの身の上、何を苦んで、佛に祈らんとするのであるか、實にそこに祈る思抔あるではない、實に唯、感謝の涙に咽ぶの思あるより、外はないのである、あゝこれぞ、これ所謂入信者たる者の、心的狀態であるので、實に是、仕合せな身の上であると、いふより外はないのである。

第九項　感謝の生活

一

あゝ思へば思へば、我身は仕合せな身の上であつたよな、思ひ回らせば、最初此世に生れ出でたる當時、たとひ踏み潰ぶされて仕舞ひたればとて、其迄であつたのに、其が情けの御手に抱き上げられ、夜の目も寢ずの御慈悲に包まれて、懇にいたはられ、大切に保護せられつ、育て上げられて、今日に及びたる者、何たる有り難き事であつたらうぞ、そこに兩親の恩惠が思はるゝのであるのみならず、其他我身を取卷ける所の者、卽ち兄弟にもあれ、親戚にもあれ、又

別して阿彌陀佛の信仰の一斑を叙す

は朋友にもあれ、凡てが皆、我身と相親しき間柄の者のみの集り、我身に親切なる者のみの寄り合ひであつたのである、然るにこれを、これ思はずして、從來永く常に之を疑ひつゝあつた事もあるといふこと、何たる愚かな事であつたよな、我れ今思ふてこゝに至れば、たゞ耻かしさに堪へぬのである、かゝる耻かしき心を持ちたりし我身をも、父母は之を捨てたまふ事もなく、親戚は之を斥けたまふ事もなく、朋友は之を責むるに至る事もなく、終始、我爲に謀りつゝあつて降されたといふ事が、唯實に感謝に堪へぬのである、實は、豈に啻に父母のみならんや、親戚朋友のみならんや、米を賣り、菓子を商ふ人を初として、諸種の商業を營める御方も、其他、農業家にてもあれ、工業家にてもあれ、孰れの御方も皆、我の爲に謀りつつありて降されたるに、あらざるはなかつたのである、また彼警察官あり、裁判官あり、内閣の諸大臣あり、皇室ある所以も、皆是國家の安寧を保ちて、この我れを、常に平和の中に生存せしめたまはんが爲の者であつたのである、加之、天地の間に、草木ある所以、山川ある所以、空氣ある所以、特に又太陽の御照しある所以、一として、この我の爲の、恩惠ならざるはないのであつたのである、あ此等世界の萬物の内、その孰れの一を缺くことあるとも、この我身は遂に、生存し能はざるに至らねばならなんだのである、然るに能くも斯く迄整へられて、この我身が常に安穩に、其日々々を送らせ

られて來たといふ事を思ふに、其處に世界の上に、其處に萬物の上に、常に尊き御慈悲の充ち渡らせられつゝあつたといふ事を、感ぜずには居られない樣になるのである、あゝ我身は、大なる御慈悲に包まれて居た者であるよ、大なる御情けに圍まれて居た者であるよ。

二

加之、我れ若他の時に於て、他の世界に生れ、他の境遇に於て置かるゝ事もありたらんには、今日の此精神狀態を持つこともなく、隨て又、此尊き阿彌陀佛の信仰に入ることもなくて終るに至るべくもあつたであらうと、思はるゝに付ては、今日、此處に生らされて、而も此境遇に置かれてあつたといふ事が、有り難いのである、あゝ思ふて此に至れば、この我をして、今日此境遇に在らしめんが爲には、父母、親戚、朋友、知人の間に、既に其豫定があつたのでもあり、其他周圍の事情、社會の模樣、世界の形勢、日月星辰の運行等、宇宙萬般の事物の上にも、其準備があつて、能く我を養ふてこゝに至らしめ降されたのであるといふ事を思ふに、其處に、只管に、唯感涙に咽ばざるを得ざるに至るのである。

而して其が又、たゞ現代に於て初まつたのではない、今日に於ける此文明の程度の、此世界をば、此我れの前に、持ち來さんが爲には、實に過去遠劫の其時以來、幾千萬の人に依て、種々無量の手數

は加へられて、以て此に至りたる者であるといふ事を思ふに、其恩惠の一ト通りならざること、言語の能く盡し得べきではなく、想像の能く及ぶべきではないと味はれ得て、特り、深き感に打たるゝに至らざるを得ないのである。

あゝ我れはこれ、何たる仕合せの身の上であるよ、今はたゞ、此長時に亘れる、而も此廣大無邊なる御慈悲に向つて、心底より、御禮を申上げんと欲するの思あるより外はないのである。

三

然り、御禮を申上げたいが腹一杯であるからは、彼處へも御機嫌伺ひをし、此處へも訪れをして、こんな不束なる身の上にも、若も相應したる御用でもあるならば、及ばずながらも、其御手傳をさせて頂き、せめては百千萬分の一なりとも、御恩返しを致したい者であると、いそしまるゝのである、然れば則ち惰けて居らるゝ譯ではない、怠りて居らるゝ筈ではない、裏表のあるべき譯もなければ、影日向のあるべき筈もない、たゞ御恩の前に、己が力に契ふたる仕事を、出來得る限り一生懸命に、まごゝろ籠めて、勤めさせて頂くといふの觀念より外はないのである。

四

一たび信仰に入りたる上からは、商ひをするのも、此意義に於てであらねばならぬのであり、勤めをするのも、此譯に於てゞあらね

ばならぬのである。而して若夫れ白米を商ふとすれば、此事だけは自分に御引受けをさせて頂き、何時にても、近邊の御方の差支にならぬ樣、御用の缺けぬ樣、御間に合ふ樣、致して置きたい者であるといふ心懸を以て、之を營みつゝあらねばならぬのである、此故に今日開店して、明日閉店するといふ樣な工合に、唯己の都合にのみ任すといふ樣な事であつては、世間の御方が、折角買ひに御出になつても、無駄足といふ樣な譯となりて、相濟まぬ次第であるから、一たび申出して、店を開いた以上には、飽迄も之を續けて、人樣に不安の念を起させ申さぬ樣にして居らねばならぬのである、其他、或は會社の役員となり、學校の教員となるといふも、又は農業家となり、製造業者となるといふも、全く相同じき譯であらねばならぬのである。要するに一々の仕事が、御恩返しの爲であり、御禮報謝の營みであるといふので、これ之を名けて、感謝の生活といふのである。

第十項　公的行爲

一

既に信仰を味ひて、感謝の生活に入りたる以上は、己が一擧手一投足、凡てがこれ御恩返しといふ觀念から、顯はれて來るのである

別して阿彌陀佛の信仰の一斑を叙す

から、そこに自ら、私欲の念は薄らぎ行きつゝ、偏に社會の爲に、希くは公共の爲にといふ思あるに至りて、知らず識らずの間に獻身的の行爲を顯し得るに至るのである。若夫れ獻身的の行爲であるといふならば、これ之を名けて、公的行爲と稱することを、得る者であると思はれる、而して此公的行爲といはるゝ者は、實にたゞ信仰の上よりのみ來る者であると思はれる。

二

彼無宗教の人、即ち信仰なき者の言動は、其が如何に外形は奇麗になつてあらうとも、又如何に表面が立派になつてあらうとも、皆是、私的行爲といはるべき者であらうと思はれる、蓋し其等の人の者は、其一々が、單に己を利せんが爲にする者のみであると思はれるからである、看よ、其商ひする所以も、其學問する所以も、又は會社員となり、銀行員となりて、日々勤務する所以も、皆是、己が生活、己が安寧を除いて外に、何の目的もあるではない樣に、見受けられてあるではないか、要するに其等の人は、一切の仕事を、ただ己が立身出世の爲の手段とのみして居るのであり、又世界の全面を、たゞ己が安寧を謀るが爲の舞臺とのみして居るのであると思はれる、而して此目的を達し、此希望を充さんが爲には、時ありて社會の利益を謀ることもあり、又は公共的の運動を試みんとする事もありとはいへ、若も其が、己の利害と相合せざる場合もあるに至る

ならば、如何なる時、如何なる場所であらうとも、早速に其を捨て顧みざらんとするの思は、常に絶えぬのである、此故に其等の人は、決して社會の爲に働くのではなく、又決して公共の爲に盡すのでもない、打明けてこれを云ふならば、公共の幸福といふを口實とし、社會の利益といふを假面として、其實、己が利益を謀るのであり、其實、一身の爲に盡すのであると、云はねばならぬのである、隨て其處に、權謀は用ゐられ、術數は行はれ、不實の行爲も起り、不親切の所作も顯はるゝに至るのであると思はれる。

あゝ、此種の人が、たとひ幾人この社會の間に活き存らへて居て呉れたればとて、決して其處に何等の恩惠をも感じ得べくあるではない、又決して其處にすこしばかりの安心も有り得るではない、公衆はこれが爲に、却て常に不安の念に襲はるゝに至り、絶えず心配の思を、起さしめられつゝあるに至るのである。隨て公衆は其處に警察官の保護をも請ひ、司法官の監督をも、求めて已まざるの思は常に切ならざるを得ざるに至つて居るのである。

あゝ、人に心配の思を起させつゝあり、又常に不安の念を生ぜしめつゝあるといふ事ほど、世に罪なる事もなく、また世に無慈悲なる事もないのであるが、無宗教の人は、これ無慈悲の人であるよ、信仰なきの人は、これ罪の人であるよ。

三

別して阿彌陀佛の信仰の一斑を叙す

我等は一日も早く宗教を持ち、又一刻も早く信仰の人とならねばならぬのである、若夫れ信仰に入りて、其處に感謝の生活に入り、其處に己を忘れて、所謂公的行爲を行ひ得るに至るならば、己自身の幸福は云ふに及ばず、延いては己が周圍の人々をして、平素に毫も不安の念を起さしむる事もなく、常に安心の思あらしむる事をも得るに至る譯でありて、乃ち罪は變じて功德ともなり、無慈悲は去りて慈悲心とも、なるに至るでもあらうと思はれる、あゝ、而して皆是佛邊の御計ひに由る者であるぞと、心底から尊まるゝに至るのである。

第三章　因に誤解を通ず

第一項　過現實感の擴充

一

世には信仰問題に苦んで、煩悶懊惱の極、到底解らぬ者と思ひなして此上は何共、工風のして見やうがないといふ譯から、モハヤどうならうとも構はぬ、たゞ宜しき樣にと、阿彌陀佛に御任せする事にした、といふて居る者がある。あゝ是、何たる寂しき信仰であらうよ、否ナ實は此等は未だ信仰と名くべき者であるではない、唯

是、自ら行き詰りて居るのみの者であるとしか思はれぬ、其故に其處に何等の安心があるでもなければ、又其處に何等の喜もあるではない、隨て又、未だ心の重荷を卸して居るのでもなければ、煩悶がなくなつて居るのでもないと思はれる。其等は實に我聖人の信仰といはるゝ者とは、天地の相違があり、雲泥の區別がある者と云はねばならぬのである。蓋し、我聖人のは確實に阿彌陀佛の御慈悲を味ひたまひたのであるに、此人のは、未だ其を味ひ得て居らぬのであると思はれる、若夫れ然らば、聖人は如何にして之を味ひたまひ、此人は何故に之を味ひ得ぬのであらうかといふに、結局、眼の付け所が違つて居るのであると思はれる。

二

如何に違ふかといふに、其が實に時間の問題であると思はれる、今少しく之を云はんに、聖人素ト未來の大事に就いて、心配せられたまひたのであるに相違はないが、其蘇るに至らせたまひたのは、單に未來をのみ眺めたまひての事であるのではない、我聖人は思召さるゝ樣、今迄はうか〳〵して過ごして居たとはいへ、實は此身、遠き過去の古の時より、現在の今に至る迄、實にやるせなき御慈悲にはぐゝまれて、こゝ迄送られて來たのであつた、若夫れ、此御慈悲あることなかりせば、決してこゝ迄來る事も出來なんだのであるのに、今は實に生れ難いとある此人間世界中に生れさせられ、遭ひ

難いとある此佛法に遭はさせられ、殊に尊き此彌陀法に遇ひ奉る事を得て、その佛願の生起本末を承りて見れば、其處に疑心も何もあつたものではないと、先づ其處に過去の御慈悲を眺めさせられ、先づ其處に現在の今を喜ばせられ、此過去と此現在とに於ける尊き御惠みを、確實に御實感あらせられて、其處に疾くも、既に感涙に咽ばせらるゝに至つたのである。

而して更に之を擴充して、未來の末にまでも推し及ぼさせられ、この尊き御慈悲の中に懷かれつゝ運ばれ行く我行末、案ずるにも及ばず、苦勞するにも及ばぬのであると、其處に深き信賴を、起させられ、其處に大なる安心を得させらるゝに至つたのであるといふ事を、味はねばならぬのである。

三

然るに此人の見當違ひをして居るといふのは外ではない、實に過去より現在に至る迄の、此尊き恩惠にすら未だ氣付き得ずして、單に未來の行末をのみ眺めて、其處に何物かを、握り來らんとして居るといふ事是であると、知らるゝのである、思へ、未來といふは其文字の示すが如く、未だ汝の前に來らざる者であるといふ事を、然り、其未だ來らざる者の上に、何者かを捕へんと欲し、何者かを實感せんと欲したりし事の非なりし所以、今更之をいふ迄もないのであつたのである。

四

記憶せよ、何人も先づ過去を眺め、同時に又現在の今を味ひ、其處に確實に御育ての御慈悲を、實感するに至らねばならぬのであるといふことを、而して又其が更に未來へかけては、一の大なる嬉しき希望となりて顯れ來る所に、其處に所謂信賴の眞意義を生ずるに至るのである。斯くして此信賴起る所に其處に、重荷を卸したる味あるに至るを、之を名けて信心歡喜といひ、又其處に、御助けあらうずる事の嬉しや有り難やと、喜ぶ思あるに至るを、之を名けて慶喜の心といふのである、あゝこの睹易き味を、彼人永く思違へて居たといふのは、氣の毒の事であるとはいへ、世間の多くの煩悶者は恐くはこゝに迷ふて居るのではなからうかと、思はるゝのである。

五

今手近く之を譬へて云はんに、我肉の親の、御慈悲を味ひ得たるの模樣を眺むるにも、亦此の如き道程であつたといふ事が、味はるのである。卽ち我親が、明日以後に於て、我に與へたまふべくある所の、或恩惠が有り難く感ぜらるゝといふよりは、寧ろ業に既に永く與へられ來りたりし過去の御慈悲、幷に現在の今、暫くも見捨てたまはぬ尊き御なさけ、其が有り難いと感ぜらるゝのが、最初であるではないか、而して既に一たび、この過現の御慈悲を味ひ得たる上からは、もはや未來の行末も、此溫き懷に抱かれて行くに、

何の心配もあるではない、何の苦勞もあるではないと、そこに信頼の思あるに至らしめらるゝのであるではないか。

六

而して其が又實に所謂信頼である、これ理窟であるではない、これ道理であるではない、そこに道理を離れ、そこに理窟を離れて、たゞ己は斯く之を信ずるといふより外に、何者もあるではない、若夫れ之を理窟の上、又は道理の上から、冷かに眺め來ることあらんか、假令今迄は御慈悲のみなりし我親も、或は明日以後、急に無慈悲の人たるに至るやも知れぬ抔と、論ぜらるゝ譯もあるかは知らぬが、苟も子となりて生れ來りたる以上、決して斯く疑ひ得べくあるではない、命にかけてもそれが堅く信ぜらるゝのが、實に不思議の譯であると思はれる。然り、不思議の譯に由て、斯く一たび信頼したる所に、其處に安心の思あるに至り、其處に歡喜の心あるに至るのである。然り、歡喜といふも安心といふも、實にたゞ一の信頼より來り生ずるに至るのである、若夫れ之を疑ふことあるに至らんか、其處に不安の念は生じ來りて、一日も半日も、心安らかに親の前に、坐りて居られる譯の者ではないのである。

七

又更に一の譬を設けんに、彼太陽は明日も昇るであらうといふ事は、蓋し、過去より現在に至る迄の實感に照して、之を信頼するに

至つたのであらうよ、若夫れ之を疑ふて冷かに眺め來るならば、明日以後太陽は、或は昇らぬ樣にもなるでもあらうかなどと、思はるるにも至つて、其處に不安の念に襲はるべくあるに至らねばならぬのであるが、其處が實に所謂信賴である、之を信賴する所に、其處に安心の思あるに至るのである。

八

あゝ信仰の問題は、所謂信賴でありて、これ以上に云ひ得べくあるではない、若夫れ之を疑ひ、斯く之を信ずる事能はずといふならば、もはや其上、無理にも之を信せよと云ひ得るではない譯から、其人はたゞ其人の隨意として、之を任せ置くより外はないのである

さりながら其人は、決して永久に、安心し得るの時はないのである

といふ事だけは、こゝに慥にいひ得るのであるから、たゞ其だけが御氣の毒であると思はるゝのである。

第二項　靈光に觸れざる可らず

一

或人はまた古來の怪しき學究的形式に囚はれて、あれでもない、これでもないと追ひ回はりて、おほかたこんな事でもあらうかと、或模型を捕へ來り、無理にも己が心を、其にあてはめやうと訓練を

施して居る者がある、隨て其心的狀態を解剖して見れば、解つた樣で實は解らず、味ひ得た樣で實は味へず、何となく其處に物足りぬ所がある譯から、こんな時にこそと腹にもない念佛を稱へ出して、以て自ら慰め、以て自ら問えを忘れんとして居るのである、此故に其念佛はこれ、所謂歡喜の上の其ではなくて、實にこれ、不安の叫びの變形に外ならぬ者であると思はれる、嗚呼危い哉、危し、といはねばならぬ樣な譯の者であるが、世には此種の念佛を稱へて居る者も、甚だ尠なくはないのであらうと思はれる。

譬へばこれ畫家が、其師匠より四君子の手本を授けられ、或は花鳥に、或は山水に、其與へらるゝまゝに習ひ學びて、一應、繪畫の形式を、聞かしめられつゝ、これでこそ、あれでこそと、所謂形式に囚はれて、たゞ其處に、樣に依て胡盧を畫いて居るに、相似たる者であると思はれる、卽ち是、たゞ手本と相似たる形骸を模寫して居るに過ぎぬのでありて、其處に何等の生命も宿りて居るのではない譯から、隨て又、己自ら如何なる趣味をも感じて居るといふでもなく、又人をして何等の快感をも覺えしむるといふでもないのであると思はれる。

二

我宗の信仰は、此の如く唯單に、形式に囚はれつゝあるといふでもなく、又何等の生命も宿らぬ所の、死せる形骸を守つて居るとい

ふのでもあるのではない、若夫れ眞に信仰を味ひ得たといふならば我はこれ阿彌陀佛の溫き懷の中に抱かれつゝあるてふ觀念ありて其處に世界萬般の現實の上に、常に大なる一種の尊き靈光透徹し來りつゝあることを覺えて、其處に常に大なる別天地に遊びつゝあるの思あるに至らねばならぬのである。

譬へは彼畫家が、一種の心眼を開いて、此天地を眺むる時、奇なる哉、妙なる哉、天地の全體が、其儘にこれ活ける一大繪畫であつたよといふ事を、味ふに至ると相似たる者であると思はれる。

看よ、彼處に山の高く聳えて居る姿、此處に水の長く流れて居る模樣、鳥は蒼空に翼を伸ばして戯れ、魚は淵に躍りて遊ぶの有樣、實にこれ、天然的の繪畫でありて、其處に自然の妙趣が顯れて居るではないか、而して其圖案の微妙にして不可思議なる事、實に言語を絶し、思慮を超えつゝ、到底、拙き筆の能く寫し得べきではないと、たゞ驚かさるゝに至るのみであるではないか、苟も畫家といはるゝ者、思一たび此に至るならば、其處に乃ち精神恍惚として、我我を忘るゝに至らざるを得ない譯であらうと思はれる、

而して何ぞ圖らん、實は我れ業に既に、其一大繪畫中に抱き包まれ了りつゝありて、而も此我れ既に是、其一大繪畫中の一小人物として扱はれつゝあつた者よとさへ、味はるゝに至つて、其處に云ふ可らざる尊き一大靈氣に觸れつゝ、常に其靈氣に依て刺擊せられつ

つある我身であつたといふ事を、感ぜざるを得ざるに至る譯であらうと思はれる。

繰返して之を云ふに、信仰の妙趣を味ひ得たる者、實に此貴家と相似たる感なくんばあらざる譯であるのである、卽ち其處に世界は實に微妙にして不可思議なる一大靈光に覆はれつゝ、常に靈的の光景は眼前に影現し來りて、己は晝夜朝暮に、其光景界中に棲息せしめられつゝあるの感あるに至つて、其處に常に快感を覺え、其處に常に妙趣を味はしめられて居るのである、これ蓋し、信仰を味ひ得たる者の心的狀態であらねばならぬのである、卽ち之を要するに、信仰なる者は、實に靈光に觸るゝをいふのであると、いひ得るのである。

第三項　貧富を超絕す

一

信仰は靈光に觸れて、常に其靈光界裡に、逍遙せしめられつゝあるとはいへ、尙且つ其處に、貧困變じて富貴となるといふでもなければ、身に纏ひなれたる襤褸の着物が、急に改まりて、綾羅や錦繡となるといふでもない、卽ち〻〻もとの如くに茅屋の中に起臥し、舊の如くに粗食を口にしつゝあるのでありて、其處に何等の變化をも產み出し來るではない、故に貧しきは貧しきまゝに、賤しきは賤しき

まゝにといふ譯でありて、所謂「このまゝに」といはるゝ所の者卽ち是であると思はれる、若夫れ之を貴族富豪の生活狀態に比ぶる事あらんか、極めて簡單に、極めて劣等に、到底同日の談ではないといふ事を、自覺しつゝありとはいへ、かゝる卑賤の境遇の中にも、尙且つ彼尊き靈光は映徹し來りて、我は今其溫き懷の中に、養はれつゝある事を思ふ時、こゝに、自ら喜んで感涙に咽ばざるを得ざるに至つて居るのである。

また彼畫家が、一たび世界の一大繪畫を眺め得て、其靈氣に觸るゝ時、其處に決して物質的の缺乏が除かるゝに至るといふでもなく金穀、急に倉に充つるに至るといふでもないではあらうが、いもとの如くに恬淡たる生活を營みつゝある中にも、心に常に山水の明媚を眺め、心に常に花鳥の妙趣を味ひつゝある時、其處に自ら愉快の念あるに至らざるを得ざる譯と、なつて居るのと、相等しき譯であると思はれる、卽ち畫家も貧しきは貧しきまゝにといふ譯でありて、こゝにも亦、所謂「このまゝに」て妙趣が顯れて居るのであると思はれる。

信仰の生活が、實に又、此畫家の其に似たる者であらねばならぬのである。

二

さりながらまた、富貴の者が富貴であるに差支もなく、貴族の者

が貴族であるに妨げもないのである、唯信仰は、貧富貴賤を外にし物質界を超絶し、精神界裡に一の大なる靈的光景を味ふにあるのであるから、其處には貧富貴賤の區別が、何等の權威をも揮ひ得るではなく、一切が平等に見做されて來るのであり、たゞ靈光に觸るるを、これ尊しとし、其然らざるを、これ卑しとするといふに外ならぬのである。

實にまた又彼畫界に於ても、富貴者の畫けるを尊しとするといふでもなく、貧困者の製作を卑しとするといふでもなく、其處に繪畫の前には、富貴もなければ、貧賤もないといふのと、全く相同じき味であると思はれる。

第四項　單なる轉居にあらず

一

信仰は靈光に觸るゝにあるのであるから、此事なくてたゞ、時間的には未來の時に、空間的には遠距離の西方に、此身を轉居せしめられさへすれば、其で善いといふ譯であるではない、たゞ無意義に形式的に、斯く運ばれ得たればとて、其處に決して何等の樂みをも感ぜしめられ得べくあるではない。

譬へば彼蛇の如き又は蛙の如き下等の動物を、之を憐み、之を抱

き上げて、我等の住へる家屋の中、座敷の上に居らしめたればとて其等が決して其處に、快感を覺え得べくあるではないと、相同じき譯の者であると思はれる。

二

此故に我等は、先づ時間的には現在の今の時、空間的には娑婆界中の此處にありて、疾く彼尊き一大靈光に觸るゝに至らねばならぬのである、若夫れ此靈光に觸るゝ事なからんか、乃ち形式的に彼土に轉居せしめらるゝといふ事さへ、有り得べくあるではないのである。

三

若夫れ靈光に觸るゝとせんか、其端的を、名けて之を一念歸命の信といふのでありて、宗祖は此時を名けて、不體失の往生を遂げ得たる者とすと、宣はせられてある、又此時以來、「心は淨土に棲み遊ぶ」ものとも仰せられてある。

乃ち知る、靈光にさへ觸るゝならば、實は未だ彼土に轉居せしめらるゝに至つては居らずとも、其處に既に、最早轉居せしめられたる底の味を、感せしめらるゝに、至つて居るのであるといふ事を、何人も能く、味ひつゝあらねばならぬのであると思はれる。

第五項　蘇るにあり

一

因に誤解を通ず

或人は云ふ、他力の信仰は、卑屈に流れて、生氣を失ひ、努力的精神を滅却する者である云々と、これ蓋し他力的信仰の眞意を解せざる者のいふ所であると思はれる。

二

元來我等の現實的の心は、決して何人にも打明けられぬまでに、濁れる者であり、汚れて居る者でありて、此心を、直に是善心といふ事もならねば、卽座に是佛心と稱する事もならぬのである、そこで如何に卽身成佛を說くの敎にもせよ、このまゝ、これで善いとは云ふて居らぬのである、一たびは是非に此心の上に、彼尊き佛心を融じ來りて、其處に初めて、此儘これで善いといふの悟を開かしめやうとして居るのである、譬へて之を云はゝ、有限相對の小なる波に囚はれて居る此心を、此儘これで善いといふのではない、其處に絕對無限の大なる水あることを知らしめて、此水と相融せしめたる所に、そこに小なる波の其儘これ水、此身このまゝ是佛てふ妙趣を味はしめんとして居るのである、若夫れ、此種の手數を加ふる事もなくて善いといふならば、其處に敎ふるの必要もなければ、傳道するの苦勞も入らぬ譯となるのである。

三

他力宗に於ても亦同樣の譯でありて、現實的の此心、卽ち波の方面とも云はるゝ者を押へて、これ直打なき者であり、これ暗黑的の

者であると敎へて、其處に反省の念を起さしめ、其處に慚愧の思あらしめて居るのである。

四

さうして見ると、自力宗に敎ふる所の者も、他力宗に說く所の者も、全く相同じき基礎の上に立てる者であり、凡ての人の心を、一たびは小なる者より、大なる者にまで、蘇らせやうとして居るのであるといふ事は、皆其揆を一にして居るのであると思はれる、唯その、之を蘇らするの法に於て、淺くあるか、深くあるか、抽象的であるか、具體的であるかの違があるので、同じ佛敎中に於ても、或は本來の面目（是水）に還れよといひ、或は眞如の大心（是水）を發揮せよといひ、而も其、本來の面目といふ者も、眞如の大心といはるゝ者も、素是、己自身（小なる波）の本體（大なる水）であるといひ、己自身の奥の院であるといふ樣に、己れ〳〵と說きなして居る譯から、其處に確に、努力的の精神も起り、自ら活氣も沸いて來る樣になつて居るのが、所謂自力宗の敎へ方であるが、こゝを他力宗の信仰よりすれば、直打なき此身（譬へは波の如きものか）をも、見捨てたまはざる御慈悲（譬へは水の如きものか）が有り難い、其親樣の御恩が尊いと、感涙に咽びたる上から、何とかして、其御恩に報いたい者である、何とかして、御禮の爲に、御用を勤めさせて頂きたい者であると、こゝに努力的精神を發揮して、寢て居る事もならず、惰けて居る事も出來ず、感謝的の大活動を起

すべく、蘇らしめらるゝに至つて居るのである。

五

斯様な譯で、自力宗も蘇るのであり、他力宗も亦蘇るのでありて、相共に蘇りたる上の活動は、兩者全く其形を同うする者であるといひ得るのである、他力の信仰が、卑屈に流るゝといふならば、自力の信仰も其であり、自力の信仰が努力を促すといふならば、他力の信仰も亦同樣であるといはねばならぬのである。

唯其異る所を云はゞ、自力宗の其は、何事をも己が直打として眺め來るのであるから、動もすれば、憍慢の頂に登ることもなきを保せざる譯の者であるのが、其弊ともいふべき者でもあらう、他力宗

の信仰は、凡て御慈悲の上よりの御育てぞと味ふのであるから、動もすれば、所謂卑屈に陷る事もなきにしもあらずと、いひ得るのが、其害といふべき者でもあるのであらう、さりながら、弊といひ、害といはるゝ者は、敎其者の上に附添ふて居るのではなくして、實は是信者の上に起り來る所の者である譯から、此等の上より、敎其者の價値を判ぜんとするのは、少しく無理であるといはねばならぬのである。

譬へば電燈は便利であるけれども、人を殺すこともある、汽車は文明の利器ではあるけれども、衝突する事もある、などゝいひて、此等を批難するのと、同じ樣な譯であると思はれる。

因に誤解を通ず

第四章　信仰の副産物

第一項　桃栗三年柿八年

一

現代の世界は、人心頗るあらび來りて、彼處には人殺しあり、此處には自殺者あり、悲慘彌々其度を高め、酸鼻益々其極に達しつゝありて、人の心膽をして寒からしめつゝある譯であるが、これには幾多の原因があるにもせよ、其中の一は、確に是、信仰の缺乏、無宗教の結果であると、思はれるのである。

二

蓋し宗教、殊に佛教の信仰を味ひつゝあらざる者は、其心の据りが、常に現在主義になつて居るのであると思はれる、卽ち己が生命を單に現在一世にのみ限りて、僅に五十年てふ短き時間を、己が生存の全部と心得、此間に於て一切の締め括りをなし、あらゆる總勘定をなし了らんと欲しつゝある者であると思はれる、其故に若も其處に百千萬圓の資本を投じて、或事業を開始したりとせんか、其が早速に花開いて、卽座に實を結ぶに至らざれば、承知が出來ぬといふ迄に、氣短かになりて居るのである、其も其筈、己が壽命を僅に五十年と見たる上には、一刻も早く、相當の報酬を受くるに至らざ

れば、其が遂に損害たるに終らんことを恐るゝを以ての故であると思はれる、此故に若夫れ、果報の來ること少しく遲るゝこともあらんか、これぞ彼人の罪、此人の咎と見込みなして、そこに直ちに、掛け合ひに行き、爭ひに行き、喧嘩をなし、投ぐり合ひをなし、尙且つ心の落付かぬ時は、遂に人を殺すに至り、一人殺しても氣が濟まぬ時に、そこに二人を殺し、三人を殺し、五人を殺し、七人を殺すにさへも至るのである、而も其が、極めて、殘忍酷薄なる、むごたらしき方法に於て行はれつゝある者、蓋し是、恨、骨髓に徹して居るに由るが故であると思はれる、而して是は、氣强い者のなす所の者であるが、若も氣の弱い者であるならば、掛け合ひに行くの勇氣も起らず、喧嘩をなし、投ぐり合ひをなし、人殺しをする迄の膽力もなく、たゞ人を恨み、己を悔み、遂には世を厭ひて自ら人間を辭職し、いつまで此世に活きて居たればとて、何の樂みもあるではない、こんな、厭やな世界に、苦痛を忍ばんよりは、いつそ死んだ方がましであらうかと、こゝに或は首縊りをなし、又は身投げをなすに至るのである、若夫れ宗教眼を以て眺むるならば、これ餘りに性急に、これ餘りに無謀なる所作であるとしか思はれないのであつて、誠に氣の毒の至りであると云はねばならぬのである。

三

諺に曰く、桃栗三年柿八年と、何人も、今年蒔いた種が、必ずし

も今年實る譯の者ではないといふ事を、合點して居らねばならぬのである、たとひ卽座に實ることはなくとも、蒔いて置きさへすれば、其が必ず、一度は實るべくあるといふが、天理の約束であるぞと味うて見れば、其處に落付いて、安心して居るだけの餘裕がなくてはならぬのであると思はれる、若も宗敎否な佛敎の信仰に入るならば、我等の一生を、單に五十年の現在世のみの者とは見て居らぬのである、蓋し我等が此世に生れ來るに付ては、無より生じたるの有であるとは思うて居らぬ譯から、遠き無始の古の時以來、我てふ者は、活き存らへつゝありたりし事を思ひて、其處に永き過去の時に於ける我生活の存在を認めて來るのである、然り我等は過去世より來れる者であるといふ事を信ずるに至つて居るのである、而して又現在一世を終りて、若も死の時に至るの場合、其處に、有が無に歸するに至るのであるとは思はぬ譯から、我てふ者は、永く未來永恒の末に至るまで、生命を保ち行くべくある身なる事を、信じて居るのである、夫れ此の如くして、我等は、過去と、現在と、未來との三世を貫いて、其生存を續け、終に死するの時はないのであるといふ信仰の上に、心を据ゑて居るのである、さうして、何事も此三世にかけて計算せられ、締め括りがつけらるゝに至るのであると、信じて居るのであるから、其處に、ゆつくりと、落付いて居る事が出來る譯となつて居るのである。

四

現在主義の人、卽ち信仰のない人は、このすわりがないのである
から、心常に性急であるのみならず、時には、善人が不幸に陷る事
もありとすれば、善の果が惡であるといふ樣に思ひなして、其處に
腹を立てるに至るのであるが、これも信仰の上よりは斯く判斷して
は居らぬのである、卽ち善人の蒔いたる善因が、今早速に花開くに
至らずして、其は一時潛勢力となりて隱れて居るまでの事であつて、
他日花開くべき力を持つて居るといふ事に疑ひはないと、確信して
居るのである、而して現に今不幸に陷りつゝある所以の者は、其が
因なくして來れるの果であるべき譯はないから、其は必ず過去に於

ける惡因の結果なるべしと信じて、其處に其不幸を忍ぶの思を持つ
て居るのである、而して又、惡人にして善果を受けて居る場合に付
ても、これに准じて味ふことを得て居るのである。

五

あゝ何たる尊き落付きであらうよ、此落付きさへあるならば、其
處に如何なる現象が、あらはれ來りたればとて、或は掛け合ひに行
き、喧嘩に行き、人殺しに出掛けやうとの思も起る事もなければ、
又は身投げをなし、首縊りをなさんと欲するの思も起り來るではな
いのである、あゝ尊き哉三世因果の理解、これぞ信仰より來る所の、
副產物の一として、數へ上げらるべき者であると思はれる。

第二項　己が種蒔き

一

無宗教の人、即ち信仰のない人は、己が身の果報を、或は親の仕向け、親類朋友の所爲となし、又は社會の事情、周圍の模樣に依る者であると思ひ、而して若も幸福の境遇に在る時は、獨り自ら喜びつゝありとはいへ、若も不幸の狀態に於てあり、厭はしき有樣に於てある時は、忽ち愚痴をこぼし、泣き言を云ひ、不平を洩すと同時に、親を咀ひ、親戚朋友を恨み、社會國家を謗りつゝあるのみならず、他の幸福なる人を見ては、之を羨み、之を嫉み、之を憎みつゝ、

終始不愉快の思を以て、世を過ごしつゝある譯であるが、若夫れ信仰眼を以て眺むるなれば、これぞ誤解であり、これぞ見當違ひであると知らしめらるゝに至るのである、即ち佛敎の敎に依らば、何事も何物も、皆是、己が種蒔きの然らしむる所であつたと味はしめらるゝに至るのであつて、所謂自因自果の理を、悟らしめらるゝに至るのであるから、若も己が現に今、不幸の境遇に於てあるといふならば、これ蓋し、自ら招ける果報に外ならぬのであつて、他を咎むべきではないと、知らしめらるゝに至るのである、此故に、貧乏であるのも、不遇であるのも、又はいやな夫を持ち、いやな妻を持ち、いやな社會に住み、いやな日暮しをしつゝあるのも、皆是、己自身

に仕掛けて置いた者と思ふ上から、自ら之を忍びつゝあらねばならぬのであると味はしめられ、若夫れ小言を云はうと思ふならば、己自身に向つて、之を云はねばならぬのであると知らしめられて居るのである、此に於てか唯恥かしさに堪へかねて、自らあやまり果つるに至らねばならぬ譯となつて來るのである、而して其に就いても、既往の事は最早悔ゆるとも及ばぬ、せめては將來に對して、大に氣をつけるの思がなくてはならぬと、こゝに大なる希望と、大なる勇氣とを以て、自ら起たんとするの思さへ起さしめらるゝに至るのである、而してたとひ人に讃められやうが、謗られやうが、そんな所に頓着すべきではない、たゞ己自らの爲に、己自ら支度をせねばならぬのであるといふ立派な覺悟に、住せしめらるゝに至るのである、そこに裏表があるでもなければ、蔭日向があるでもない、たゞ爲すべきを爲し、爲すべからざるを爲さぬといふの決心あるに至り得るのである。

二

而して又、今迄は他の幸福なる人を眺めて、羨み、嫉み、そねみ、憎んでのみ居たのであるが、これも實は大間違、其等の人々は、其等自身に、その種蒔きが善かつたればこそ、今日の芽出たき果報を、享け樂みつゝある譯で、能く行屆いた御方であり、能く御用意なされた御人であると思へば、常に敬意を表して、之を尊むの思がなく

てはならぬのであるし、又斯樣な御方を手本として、能く我心を敎へて行かねばならぬのであつたと、味はしめらるゝに至るのである。

三

あゝ何事も何物も、己が種蒔き如何に依るのであつたといふ此理解は、之を己が身に取つては愚痴を癒やし、泣き言を除き、不平の思を去らしめられ、自ら慚愧して、深く將來を戒むるの思、あらしめらるゝに至ると共に、之を他に對しては、今迄の恨みの心、嫉みの思、そねみ、憎むの過ちを去らしめられて、只管に敬ひ尊むの思あらしめらるゝに至る者、何たる有り難き事ぞと味はるゝに至るのである、これぞ又是、信仰より來れる副產物の一として、數へ上げらるべき者であると思はれる。

第三項　御見透し

一

無宗敎の人、卽ち信仰のない人は、此人世を、たゞ人間同志の集合とのみ考へて居るのである、若夫れ然りとすれば、凡そ人間なる者は、不完全極まる者であり、己が前を見る事は出來るけれども、己が後ろを見ることは出來ぬ、明るき場所に於ては、物の見分けがつくが、暗き場所に於ては、辨別がつかぬ者である、といふ事を、見